

せしに、幸ひ多少の効果を奏したるも、尙ほ不完全たるを免れざりし此に於て乎、君は一層の勇猛心を奮起し遂に脱瘧の技術を専心研究し、三ヶ年の後漸く其端緒を得、努力をすく加はりて其所信を完ふするの結果を見居を堺市に移し普通醫として門戸を張るに至りたるが、此間其研鑽は一日も怠るなく、名聲次第に世に高まるに連れ、大阪市南區木津に川村病院を新築し、其特得の治法を更に廣く施しつゝある中、明治三十五年に至り、初めて、完全無缺なる藥液を發見し、君が宿志漸く達するを得、天下に向て之を公表したり、然れども當時杏林の士は、君の成功の突如として現はれたるに對し、多くは怪訝の眼を以て眺め、君を稱して山師的俗醫なりと稱し、其苦心に對し尊敬の意を拂ふもの尠なりし、君はまた毅然として毀譽應貶の巷に立ち、時機の到來を待つの外なかりなりし

偶々同年秋、大阪醫師會總會の催さるゝあり、君は此機會を利用し、一層自説の表白に力めんとし、患者兩三名を具して出席し、皮膚より脱落せる色素のフノアラートを供覽し、多年の苦心談を爲すと共に成績を公示し、臨席諸大家に

向ひて其臨時的意見を求めたり、此に及びて曩に君の成功を怪しみたる人々も初めて其眞面目の研究に成りたる所以を了し、多年の研鑽を稱賛し、曩日の嘲聲全く跡を絶つに至り、中には尙ほ進んで斯學の爲めに盡くすべく洋行を勸むるものすら生ずるに至れり、此の一舉に力を得たる君は上京して土肥博士に對し其意見を求めたるは、博士は審かに所説を聞き激賞措かず、且つ論して曰く世の大発見は學理家に出でずして、臨床家に出づるもの多し、君の発見の如き即ち是れ、其勞は眞に多とすべく、又た斯界の一進歩を意味す、予も亦た學理上より其歡測を爲すべしと、斯界のオーソリチーたる博士の此の一言は如何に君の成功の偉大なるかを證して餘りあるべし。

君は尙ほ欠時の此の成功を以て満足せず、此の至難の治療法に向て其精神を瀝きつゝあれば他日更に一段の彩華を放つものならむ世人往々君の発見に對する神秘主義を難するものありと雖も、元と是れ實地研究に出でしものにて、學理上既に研究しつゝある點あれば、遠からず化學的分析を明らかにして實地、學說俱に審にして公表すべしと云へり、左あれ世人の誤解を招かむこ

とを虞り、相當學識を有する醫人に限り其方法を教授し、普及を圖るべしとなり。

君が強健なる精力と、透徹せる頭腦とを有することは、二十年來不屈不撓、前人未發の此發明を爲したるに依りて徹し得られむか、巨頭にして便腹、一見覇氣満々たるが如きに似ず、其資性は温良にして人と争ふを好まず、老成の風ありて甚だ親み易し、専門以外の達藝としては淨瑠璃あり、俳名を太陽と云ふ多く知らる、年齢既に五十有餘なるも、其専門的研究に至りては自ら一書生を以て居り、毫も倦色なきは特に尙すべし、斯くして時に一個の「物質的醫商」なるかの如く見られたる誤解も全く霧散すべく、君の過去は全く苦戰奮闘に陥りたるも、今後の半世は蓋し成功の賛辭を以て飾らるゝに至らむ乎、乞ふ之を旃めよ。

[Faint, illegible text on the left page]



[Faint, illegible text on the right page]



醫學士 吉田興三君

京都市大宮五辻北入

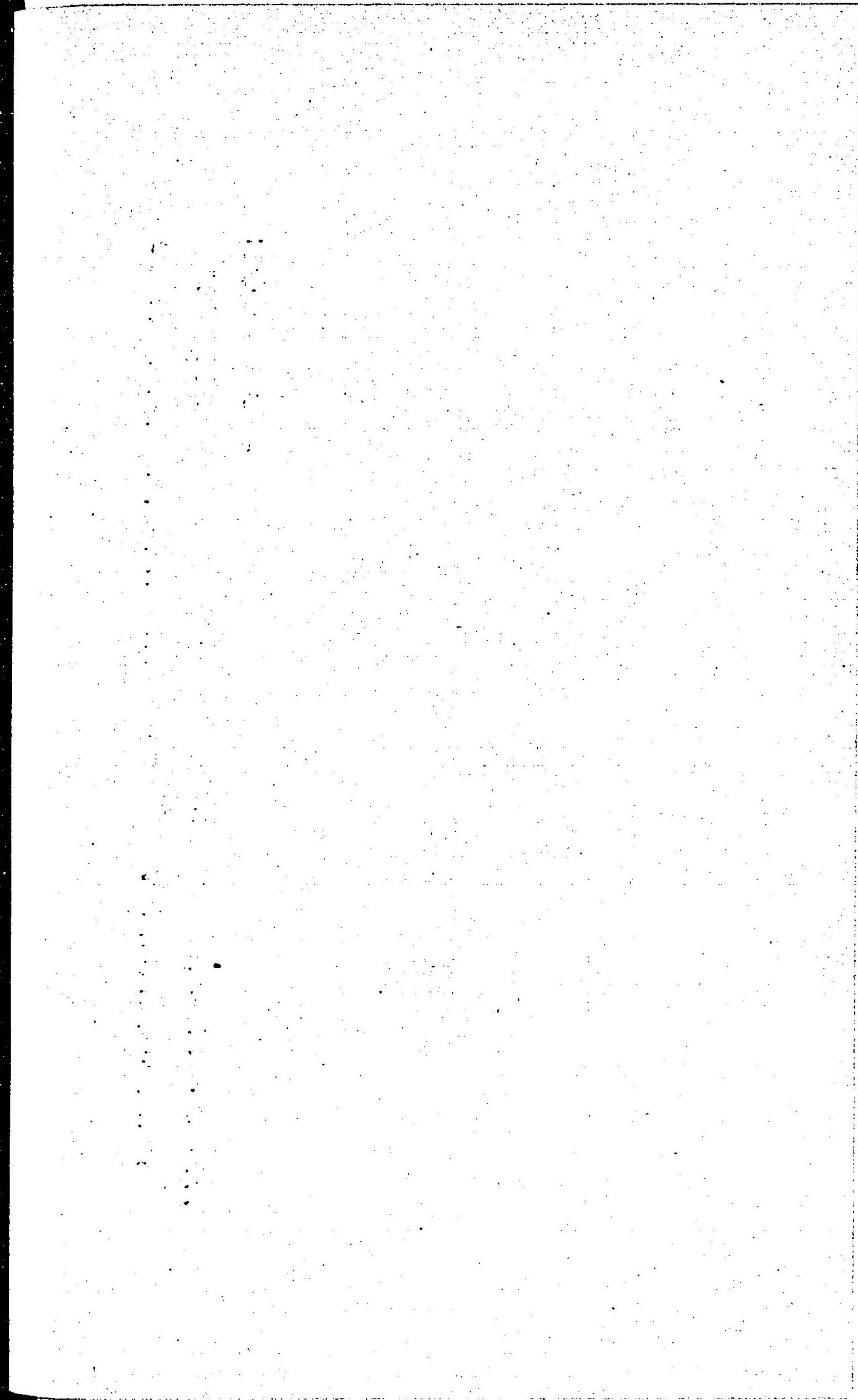
君は安政四年十二月を以て京都市に生る、父を俊吉翁と云ひ、醫を以て業とす、年少にして漢學及び獨逸學を修め、明治五年一月より同七年五月迄、京都療病院にて獨人ヨッケル、フオン、ランゲツタ氏に従ひ解剖學を研究し、同七年十一月より、東京大學醫學部に遊び、十五年六月其業を卒へたり。

十五年七月岩手縣立醫學校一等教授兼附屬病院醫員となり、十五年十二月より十七年迄、醫術開業試験委員を任せらる、十八年三月より仙臺醫術開業試験委員となり、同年五月奥羽聯合衛生會委員となる、十九年一月岩手縣醫學校を辭し、同年二月山口縣立病院副院長兼醫局長に任せられ、同年五月同縣の檢

疫委員を命せられ、且同縣地方衛生會委員となる。偶ま同年同縣下にコレラ病流行するに際し、大に其の技を揮ひ知事より賞を受く。二十年一月同縣藥舖試驗委員に任命され、同年五月地方衛生會委員となり賞を受けたり。次で二十一年四月山口病院長に任せられ、同年九月其職を辭し、山口町にて開業すること四年、同二十五年八月島根縣石見國鹿足郡畑ヶ迫村に於て、堀禮造氏の依頼に應じ畑ヶ迫病院を創立し院長となり、二十七年九月職を辭す。是より先き二十六年五月同縣下にヅワリオラ流行に際し六千餘人に種痘し、大に豫防の効を奏す。時に縣廳より褒賞を受けたり。而して同二十八年八月京都聚樂日吉病院長となり、同二十九年八月市醫長に任せられ、三十一年八月迄任にありたり。

三十三年四月に至り、君が七年間の苦心研究になる赤痢血清完成し、私立細菌研究所に於て血清製造に着手し、且つ現今の處に開業せり。蓋し赤痢血清の發見は、君が一代の偉業にして、斯界に貢獻するところ甚だ大なり。同病源につきては、曩に北里博士の「アメーバ」説等あり、尙ほ至難の問題たりしに、篤學にして熱心なる君の手腕によりて、漸く其一部の秘密を得たるものにして、其病理

の研究及び實驗は、當時各専門雜誌によりて明らかに世に紹介されたり。
資性温良にして沈黙寡言なるも、専門學術に對しては諄々説いて倦まず、一
見學者の風あり。





ドクトル
メヂチー子ル

吉村文庭君

京都市西洞院七條

明治五年六月を以て和歌山に生る。家世々醫を以て業とす。然れども家道衰へ。生計甚だ豊かならず。弟妹多くして其教養に苦み。君専心斯學の研究に従ふ。能はざるを以て。或は公吏の端に列し。或は小學校員となり。糊口の途を得つ。苦學奮闘。明治三十三年を以つて醫師の免狀を得。後京都市に於て其業を開けり。拮据五ヶ年若干の蓄財を得たるを以て。斷然業を抛ち。明治十九年を以て獨逸に留學し。ミュンヘン大學に入り。ミュルラー教授に師事して専ら内科を收め。傍らクリニックに出入し。本年夏トクトルメヂチー子の學位を得て歸朝。拾一月を以て再び其門戸を張れり。

君が往年貧苦と戦ひ弟妹を扶養しつゝ勉學を怠らざりしは、以て其克心勵
精の念に富むを知るに足るべく、到底尋常一様の徒の企及する能はざること
ろ、特に推重するに足るものならずんばあらず。
寡言黙行、君子人の風あるも、談一度其専門とするところに及べば、論議縱横
甚だ聞くべきもの多く、其蘊蓄の淺からざるを觀取せしも、特に尙研學大に力
めつゝあれば、將來一層の發展あるべく、前途頗る多望なりと云ふべし。



正六位
醫學博士

京都帝國大學京都醫科大學教授

高山尙平君

君は文久元年十二月岡山市西中山下に生る明治十九年東京醫科大學を卒業し二十年大學院入學二十一年第五高等中學校教諭に擧げられ其六月長崎病院産科婦人科長となる越えて二十八年一月京都府立醫學學校教諭に任じ同時に京都療病院産科婦人科長たりしが三十三年九月京都療病院長に推され令名大に擧る翌十月京都醫科大學講師を囑托せられ三十六年五月に及んで婦人科學産科學研究の爲め滿三箇年獨逸國に留學を命ぜられ三十八年四月を以て京都帝國大學福岡醫科大學教授に任じ婦人科産科の講座を擔任せり三十九年十月京都帝國大學醫科大學教授に轉じ爾來婦人科産科の講座擔任

たり、其の醫學博士となり、學界光榮の座に直りたるは同年九月の事にして、四
十一年五月正六位に叙せられたりき。

婦人科、産科講座に於ける博士高山尙平君は、實に京大醫科の一大雄材にし
て、其技能に至つては東大の濱田博士と伯仲の間にもあり、敏腕達識にして、風骨
仙の如く、又温潤珠玉の如し、蓋し我が醫界の珍たり。



從六位
醫學博士

高洲謙一郎君

大阪市南區末吉橋筋四丁目

關西小兒醫界のオーソリティー

佐多博士を筆頭とせる大阪高等醫學專門學校は、關西名流の叢淵たり、而して此名士流の叢淵内にありて、現に其小兒醫科長の大任に就けるは、實に我が醫博士高洲謙一郎君なりとす。

君は佐賀縣佐賀郡春日村字久池井の人、明治二年五月十五日を以て生る、明治二十年笈を東都に負ひて、第一高等中學校に入り、三年にして豫科を卒へ、次いで本科醫科に入り、二十五年を以て全科の業を卒へ、同年直に東京帝國大學醫科大學に入り、二十九年十二月其業を卒ゆ、翌年一月醫科大學雇となりて附

屬醫院に勤務し其六月醫科大學助手となる。越えて三十一年五月縣立姫路病院副院長として赴任し其十月を以て推されて同病院長となり三十二年二月更に又同病院内科醫長兼小兒科醫長となる。而して其在職中職務勉勵の故を以て賞を受けしことあり又君は此時よりして漸く名を爲し其實力を認めらるゝに至りぬ。

君の大阪に於ける最近の消息

縣立姫路病院長として名聲漸く聞ゆるに至りたる君は三十四年十一月を以て大阪に來り大阪府立醫學校教諭に任せられ同時に府立病院小兒科醫長を兼攝することとなり又同月の十四日を以て大阪府立監獄醫取扱を囑托せらる。尋いで三十六年九月大阪監獄醫務所長に補せられしが其十一月職務勉勵の故を以て賞を受く翌三十七年四月官命を帯びて獨逸國に出張を命ぜられ三十八年六月を以て歸朝す四十年五月正六位に叙せられ四十一年十月終に論文提出に依りて醫學博士を授けらる。其論文は左の諸篇なりとす。

一脚氣患者(乳兒及大人)の血液に就きて(獨逸文)

一日本小兒に於ける血液の再試験

一バヅヒレー顆粒を有する赤血球殊にアツェトン尿病に於ける臨床上及び試験上の成績

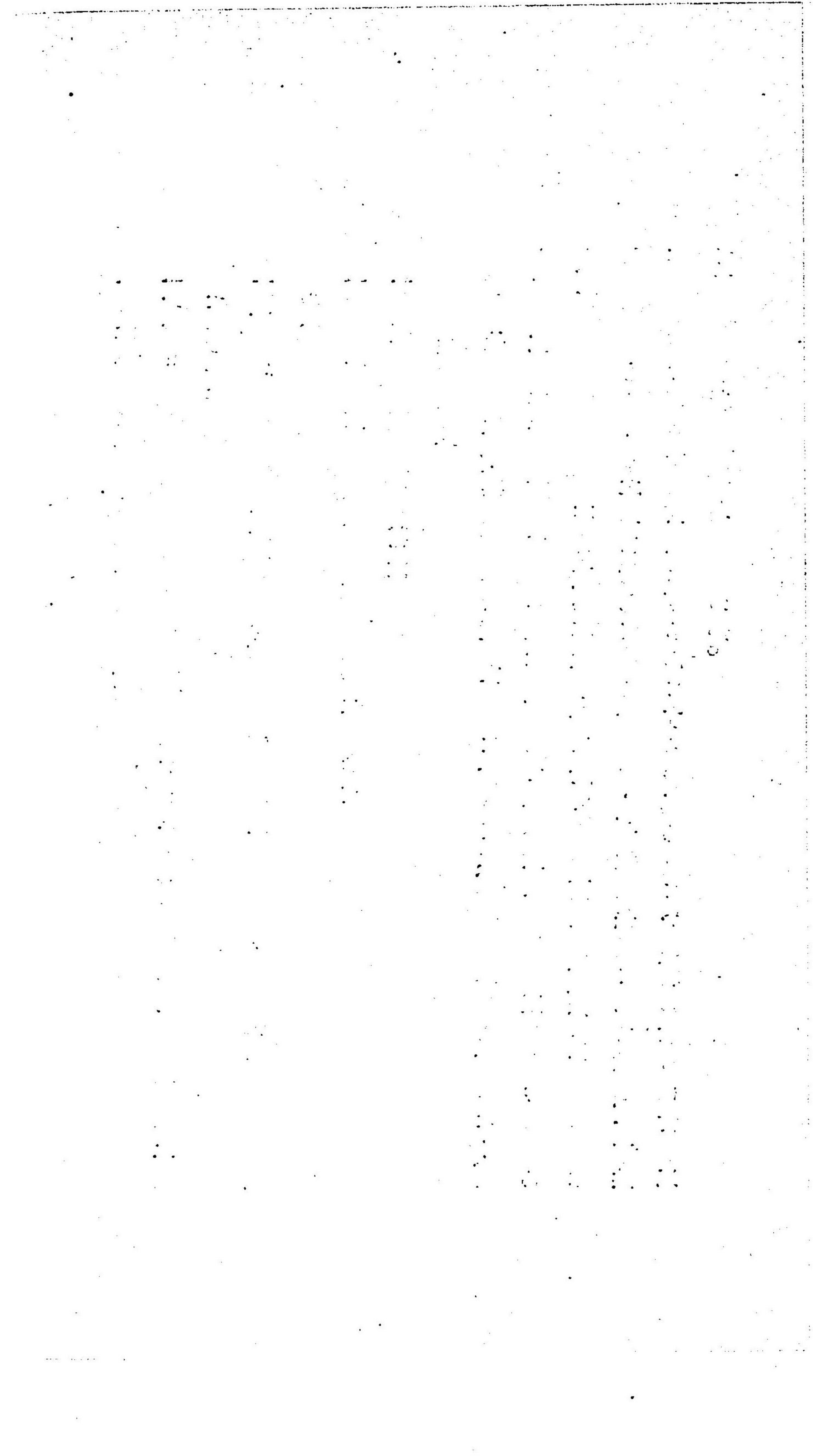
一種々なる神経病及精神病に於ける小腦皮質の組織學的變化に就きて(獨逸文)

一豚の小腦皮質の神經細胞の發育に就きて

一白癡の病理解剖の補遺

篤學の人

君は性頗る眞摯、其門下生を薰陶するに當りては、懇切丁寧到らざるなく、殆んど慈父の其子を教養するに似たり、而して其平生たる温潤玉の如きものあり、人に接して謙讓を吝まず、其專攻學科に於ても關西殆んど匹儔するものなしと稱せらるゝも、之れに對して毫も矜色なく、先進は先進として敬し、一方益其の蘊蓄を窮めずんば已まざらんとするの風ありといふ、君の如きは當に以て眞正の學者と稱すべきものか。





醫學
士

田中祐吉君

大阪高等醫學第一學校教諭

大阪杏林の名家匹田氏と並び稱せらるゝ田中氏の後繼として、又夙に病理學專攻の醫學者として令名ある田中祐吉君は、大阪の人、明治七年四月を以て生る。父祖の業を襲がんに爲大阪醫學校に入學し、明治二十七年、首席を以て卒業す。時に齡二十有一、聞らく君在學中、當時帝國醫科大學病理教室に勤務せし佐多愛彦氏の著「病理解剖學」を讀んで大に感奮するところあり、之れより病理學專攻の志を起せしと、而して君の醫學校を卒業すると同時に、佐多氏亦大阪醫學校教諭として來任せしかば、君自ら之れを訪うて平素の感懷を披瀝し、且請うて同氏の助手となり、學々斯學を攻究すること殆んど年餘なりき。明治

二十八年、日清の役あり、其十二月、一年志願兵として軍務に服せしが、幾もなくして除隊となり、還再び大阪醫學校助手となる、而して君は此間殊に熱心に病理學を研究し、明治三十年、佐多氏洋行の途に就くに際し、乃ち其代任として同校の助教諭となり、以て斯學の教鞭を執ること、なれり、越ゝて三十二年、教諭に任せられ、三十五年、臺灣總督府醫學校教授に轉任し、正七位に叙せらる、尋いで三十七年、福岡醫科大學講師に聘せられしが、日露戰役起るに及んで陸軍二等軍醫として召集せられ、留守第四師團に勤務を命せらる、翌三十八年の末軍役召集を解除せられ、三十九年を以て又復び大阪高等醫學校教諭に任せらる、次いで戰功に依りて勳六等を授けらる。

君は頭腦の明瞭に加へて其専門醫學に對する造詣の深きを以て稱せらる、大阪高等醫學校に在りて病理學、法醫學、及び東洋醫學史の各講座を擔任するの外、餘暇あれば著作に従事し、既に世に公にして好評を博せるもの頗る多し、中に就きて其専門上の著書を擧ぐれば

病理總論(第四版)

病理解剖學提綱(第四版)

臨床病理學(再版)

病理學的實驗論集

病理纂錄

法醫學講義

君は自家の専門醫學に對してのみ甚深の智識を有する人にあらず、醫學的見地よりしての公娼、色情犯罪等をも研究し、其他社會萬般の事に對しても一種奇警の觀察と趣味を有する人なり、現に以上専門醫學上の著書を除く外、此種の觀察趣味を傾瀉したるものとして

醫事斷片

公娼論

通俗病理講話

色情犯罪論

等の著あり、其他君が明治二十八年より最近に至るまで、或は雜誌に、或は又新

聞紙上に發表したる専門醫學上の論文としては「熱帶赤痢の病理」「動脈硬變の本性に就て」等を始めとし、無量數十篇を算ふるに足るべく、又君が専門以外の見地よりして經濟及教育方面に對する研究としては其屢々東京經濟雜誌に掲載せらるゝ諸篇に就て見るべく、就中最近同誌上の讀物たりし「國民教育と學童貯金」なる一篇が廣く兒童教育家の注意を惹きしが如き、此一事に見るも君が専門醫學以外の研究に就ても夙に一特地の長所を有するの人才るを認知するを得べし。

君の人と爲りや頗る簡朴、居常邊幅を飾らざるを以て有名なり、而して其性は卒直思ふところ直言して憚からず、故を以て議一たび合はずんば先輩と雖も苟も屈せず、又其學理に忠にして、一理の攻究多日を要するとも倦色なし、而してこの謹厚の態度、この熱烈の精神、是れ君が比較的後進の身を以てして、一個の學者たる名聲を失はざるのみならず、常に人をして能く其説に服せしむる所以ならん乎、君の道樂としては學事に始終する外、時に感興に觸れて花吟月詠の餘技を弄することあり、自撰吟中一二を擧ぐれば

偽りの 嬉れしきものは 月雪の

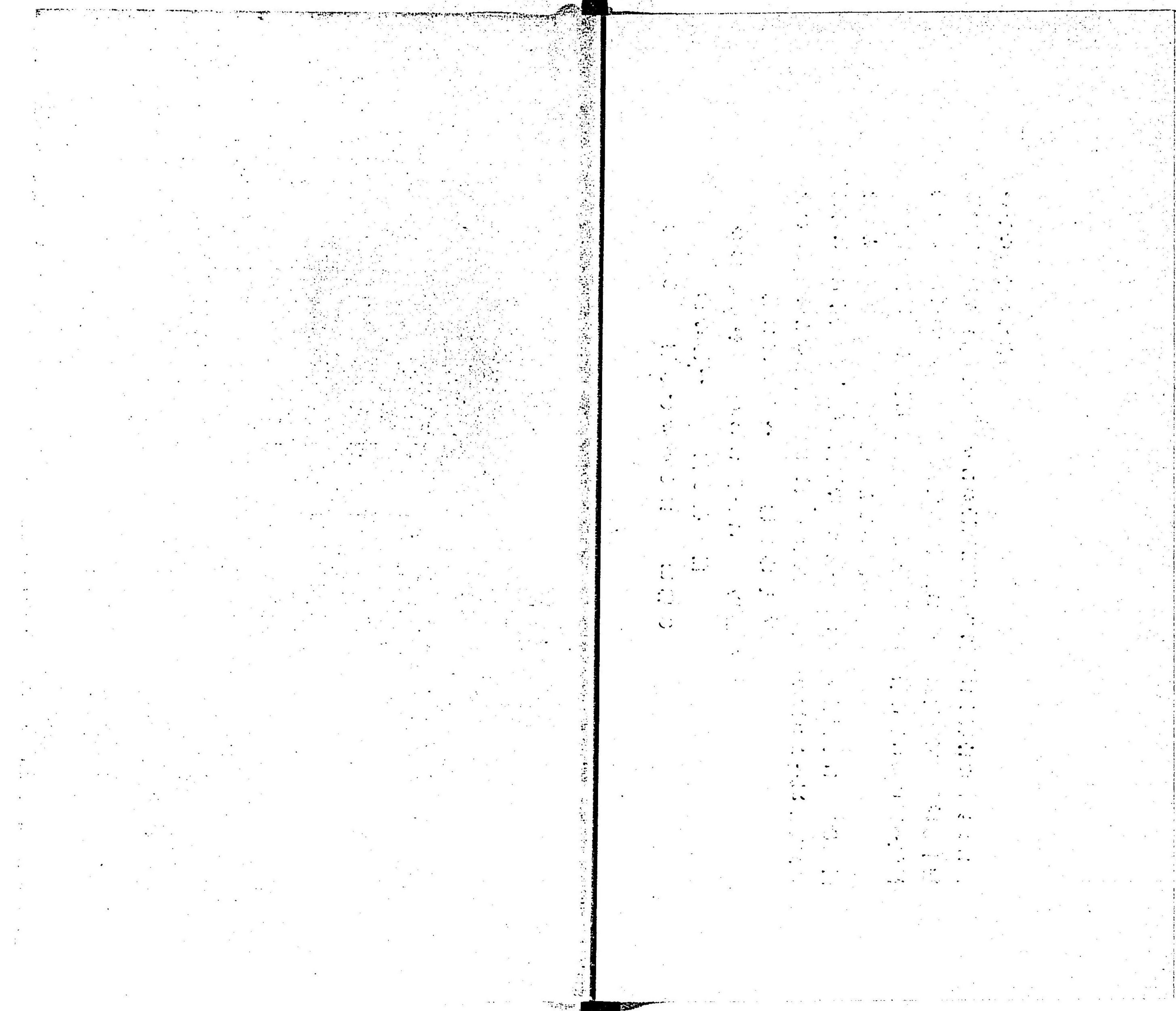
色を欺く 垣の卯の花

あはれのみ あとに残して 夕空の

雲に消ぬゆく 鐘の音かな

必しも特稱すべき名吟にはあらざるも、理情の和之れを見るべく、刀圭餘技の秀才として一方に眞下君の漢詩を推すべくば、君の如き亦確かに一方の瓊瑤たるべき資格あるものならざるべからず。

君明年三月自費を以て渡歐し、専門醫學の研究に従事せんとすと聞く、君業成りて歸朝するの時此時吾人は君の新研究に因りて我が關西醫學界の一進歩を測し得ると共に、俊髦彬々たる大阪高醫の中又新一博士を加ふるに至らんを信する者也。





ドクトル
メヂチル

田 幡 義 秋 君

大阪市東區北久太郎町一丁目

和歌山縣の人、明治十二年七月を以て那賀郡北野上村に生る、年十五にして大阪醫學校豫科に入り、二十八年卒業、更に其翌二十九年一月を以て本科に學び、三十二年十月業を卒へ、翌年六月を以て陸軍軍醫となれり。

軍職に留ること一歳ならずして、轉じて大阪府立醫學校助手となり、更に病院助手となりたるが、三十九年獨逸留學の途に上る迄、依然として校務院務に携はりつゝあり、唯其の間一度陸軍二等軍醫となり、位階勳章を賜はりたることありたるのみ。

獨逸にあるや、ミュンヘン大學に入り、研學約一年半、ドクトルの稱號を得て、

歸朝し、直ちに再び府立高等醫學專門學校教授に任せられ、同病院眼科醫長水尾源太郎君歐洲出張中、其代理を命ぜられたり。

君は大阪高醫の一俊才として多年矚目され、ありたるの人にして、眼科に關する蘊蓄甚だ大に、前途頗る有望なり、隱忍自重、更に研鑽の功を積まば、其發展期して俟つべきものあらむ。



ドクトル
メヂチー子

谷 静 也 君

京都市上京區御幸町夷川北入

君は近江國彦根藩の出、本姓は澁谷氏、維新の際祖父鐵臣翁一家を創立して谷氏と改む、明治三十年京都醫學校を卒業し、後京都府立療病院に職を奉じ、兼ねて同醫學校の助教となる、三十二年十月京都帝國醫科大學助手に選せられ、外科部に勤務し、が決然として三十四年二月職を辭し、孤劍單身、歐洲に遊學しぬ、留まるどころ、獨逸國柏林市マールブルク大學にして、病理學、外科學を專攻し、三十六年多大の蘊蓄を齎して歸朝せり、其の翌三十七年六月、京都醫學專門學校講師となり、同附屬療病院の外科部に長たり、而して之と同時に京都府看護婦試驗委員を命せられ、猶赤十字社京都支部看護婦養成所商議員を囑

托せられたり、越えて三十九年十月職を退いて専ら實地開業に従事し、昨四十年に及んで私立病院を創設し、爾來充實せる設備の下に主として外科患者の診療に其の高手腕を揮ひつゝあり、是れ君の盛名を贏得するに至れる經歷の一斑なりとす。

君、性謙讓眞摯、毫末の虚飾する所あるなし、學世滔々大風、呂敷の弊に陥れる今日に於て、君の如きは洵に推稱すべき好個の一人格たらすんばあらじ、則此の眞骨頭が巍然として異彩を放てる所以、加ふるに頭腦透徹、博聞強記にして又實に篤學の士たり、其の嘗て教壇に立つて得意の外科學を講ずるや、口雄ならずと雖も、宛ら蠶の糸を吐くが如くに諄々として竭くるを知らず、講義振りの親切にして注入的なる學生をして充分に咀嚼習得せしめずんば歇まざるの風ありき、故に今に畏敬して措かざる舊教生の多きを見る、宜なりと謂つべし、爾り、校堂に於て良教師の名を諡はれたる君は、又關西の杏林にありても外科に名國手たるの稱を馳せり、而して又社交場裡に臨んでは實に温良端直の好紳士を以つて目せらるゝ也。



醫學博士 坪井速水君

大阪市東區豐後町

青年時代の君

頭腦明晰、學識深大、之れに加へて品藻の清純なるもの、唯だ夫れ、纔かに博士坪井君を算するに足るべき乎。

君は美濃の人、文久二年を以て生る、家嚴は夫の有名なる竹林翁なり、君の家は世々農を以て業とせしも、家嚴は君の幼時聰慧にして、修學の念篤きを見、他日學問を以つて名を成さしめんと欲し、明治七年東都に遊學せしめ、後郷に招きて、貫名海屋の高弟野村東陰翁に就きて漢籍を修めしむ、尋で又東都に出で、醫科大學豫科に入學せしめ、居ること五年、明治二十二年を以て醫科大學に進

み、二十四年春、業を卒へしむ。其大學を出づるや、又直ちに當時教授間に盛名ありし老大家ベルツ博士の助手として醫務に従事せしめたり。而して此間君の才氣最も爛熟し、又一種の氣品を以て、熱誠に其學事に従ふの狀ありしを見、同僚の多くは君に對して常に稱賛を吝まざりしといふ。思ふに此れ賢明にして高潔なる家、嚴竹林翁の訓誨與つて力ありしものか。

大學卒業後より今日に至る間の君

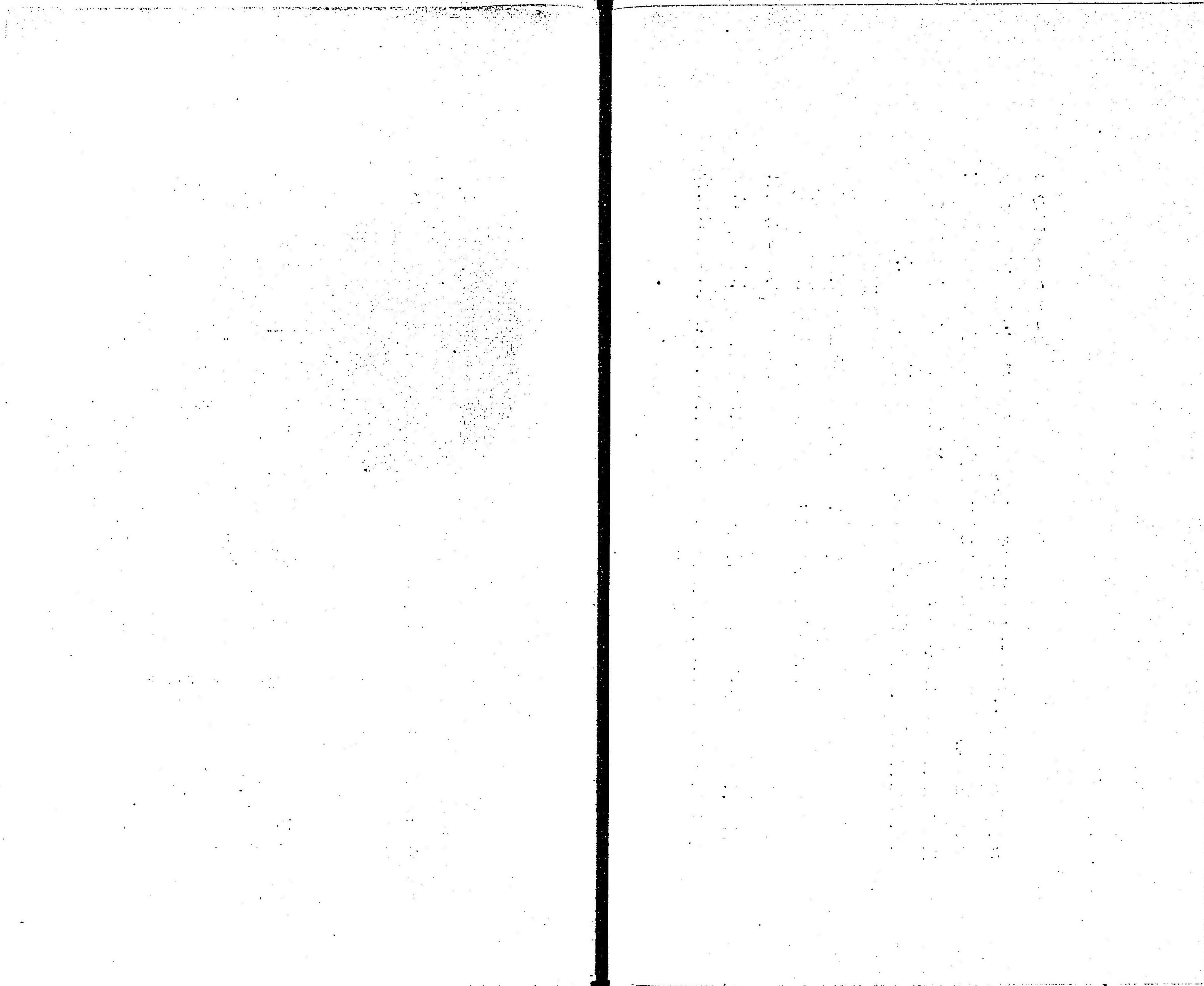
ベルツ博士の助手として精勵衆に抽んじたる君は、幾もなくして韓國釜山病院に赴任したり。是れ或有力なる先輩某氏の推薦に係るといふ。然るに君不幸にして病に罹り、客舎蕭條、其久しく癒わざるを知りて、二十五年故山に歸り來る。幾もなくして病癒ゆ、こゝに於てか又出でて社會の人となり、岐阜縣立病院に入りて醫務に従事す。後三十年に至り、大阪高等醫學校に聘せられて教諭となる。其高醫に在るや、初めは小兒科に従ひしも、前院長清野勇氏の去るや、推されて内科醫長となり、藥匙に親むの方、教鞭を執り、一時噴々盛名ありしも、越えて三十八年感ずるところありて、高醫を辭し、暫らく東京に在りしが、又再び

大阪に歸りて、同年十一月東區豊後町に開業し、門前常に市をなすの觀あり、越
して四十年一月論文提出に因りて醫學博士の學位を受く、其提出論文は左の
二篇なりとす。

- (一)人工的尿毒症に於ける諸臟器組織の變化に就きて
- (二)日本に於ける糖尿病統計に就きて(實驗)

病褥中の君

君の醫士としての態度は頗る君子的なり、其深淵の學力、卓抜の技術を有す
るに拘はらず、嘗て他に向つて之れを誇りしことなく、また患者を取扱ふや親
切を極むるといふ、君客夏病を得、往再癒せず、今猶攝津魚崎の河畔に靜養しつ
つありと聞く、吾人は我醫界の爲め此の名醫士の一日も早く快癒せられんこ
とを祈るものなり。





從五位
醫學博士

京都帝國大學京都醫科大學教授

中西龜太郎君

明治元年十一月を以て静岡縣富士郡田子の浦に生る、二十四年東京醫科大學の藥を卒ゆ、其長するところは細菌學的診斷學にして夙に令名あり、三十年九月更に内科學研究の爲め獨逸に遊學し、留ること三ヶ年、其間三十二年五月を以つて伯林に開催せる萬國結核病豫防撲滅會に推されて委員となり列席本邦斯學の爲めに大いに氣を吐けることあり、三十四年歸朝、同九月を以て京都大學醫科大學教授となり、内科學第一講座を擔任して現時に至る、其醫學博士となれるは三十五年なりとす。

溫和眞摯にして、常に患者の隨喜を受け居るのみならず、後進の薰陶に甚力

め誘掖至らざるなく其の講義の懇切なるは、君に學生間の人氣を集中せるが如し、又た恬澹にして名利を度外し、熱心唯だ講學に耽るのみなれば、其感化によりて門下の人物の輩出するあり、一代の名家として特に推尙に堪へたり。



ドクトル
メヂチ

内藤 達君

大阪市西區西長堀北通二丁目

眼科専門醫として、又多年醫育に従事して、令聞一方に高きドクトル、メヂチ
ト子内藤君は、徳島縣美馬郡半田村の人、明治四年を以て生る、本姓は山田氏、累
世醫を以て業とし、始祖より今に至りて當に十五代、其家風の古くして、其門戸
の壯なる、以て地方の一家家たるを知るを得む、君は七歳の時、叔父内藤氏に養
はれて、嗣子となり、終に其姓を冒す、稍や長するや、醫を以て名を成さんとし、岡
山に出でて、第三高等中學醫學部に入學し、専心學事に親み、明治二十六年十二
月、好成績を以て卒業するや、更に眼科専門を以て世に立たんと期し、翌二十七
年一月、笈を負うて東京に上り、駿河臺なる井上眼病院長井上達也氏に就きて

專攻すること二年、二十八年井上氏の病歿するや、令嗣達七郎君、歐洲留學の途に在り、仍て君其遺喪を繼いで院長となり、二十九、三十の兩年に亘りて其職に執掌す、三十一年一月、一たび郷里に歸りしも、偶々井上達七郎君の學成りて歐洲より歸るを聞くや、君再び京に上り、井上病院講習會に講師として三十一、三十二兩年間、最も熱心に醫育の事に従へりき、越えて三十三年三月、猶大に醫學を研究せんが爲め外遊を思立ち、終に單身獨逸に滞りて専ら眼科研究に従ふこと二年、而して業成りて歸るや、井上達七郎君病牀に在り、仍て君再び井上眼病院に勤務し、副院長として一方病中の達七郎君を扶け、一方其學び得たる嶄新なる醫術を披瀝して大に竭すところありしが、達七郎君の病在舊瘥せず、竟に自ら院長たるの職名を辭するに至り、内藤君大に悲みしも、井上一家の恩顧に酬いんが爲、此に自ら井上眼病院長の職を襲ふこととなれり、是れ實に三十五年一月の事にして、君は翌三十六年五月まで就任し、同年十月、多年西遊の志を酬いんが爲め大阪に來り、此に一戸を卜して眼科専門の牌を掲げて施藥の事に従ふこととなりぬ、而して君の大阪に在るや、三十七年醫學講習會を起し

自ら其會長となりて後進醫育に従ひ、爲めに令譽あり、現に大阪醫學會評議員として一部刀圭界の牛耳を執れり。

君は關西に於ける眼科専門の名醫として聞ゆるのみならず、其獨特の技能として稱せらるゝ眼科の細菌學的研究の如きは、我國醫學上の最新式研究たるのみならず、此種の研究に於ては君實に之れが嚆矢なりと傳へらる。又君が最も熱心に従事したる醫育事業の如きは、先輩醫學者の好んで爲さざるもの然るに君名流の地に在りて多年之れが爲めに鞠躬盡瘁したり、此くの如きは我が大阪に在りては前に緒方洪庵先生あり、後に君ありと云ふべきのみ、君の著書數冊あり、其中最も廣く行はれたるは「檢眼鏡要法」「屈折及調節器病論」の二書を算ふべし、君嘗て歐洲留學中、醫育機關を觀察するところあり、歸來其所感の一片を洩らして左の如く言へり。

歐洲の醫學界は自己の胸裡よりする生産的發達の成功せんとしつゝある時代である、けれども我國の醫學界は悲い哉、未だ此くの如き時代に到達し得ぬのである、彼地の研究所に於ては金が無くとも研究ができるが我國で

は金が無くては何事もできぬ、此くの如きは一般學生の爲に遺憾千萬である。是れ要するに施療機關の不備なるが爲め予輩微力を以て大に此事に努力しようと思つてゐるが、又醫界名流諸氏の共に力を致されんことを望む次第である。

一片の所感中に君の眞面目を見るべし、而して此くの如きは醫育事業に幾多の經驗を有する君の如きにあらずんば、以て能く爲すなきなり。

君性眞摯、學に忠に職に熱心に當代難易からざる人格の人なり、今や其名望の一方に隆々たるものある、蓋し偶然にあらざるを見るなり。



ドクトル

苗加良太郎君

京都市上京區堺町四條上ル

君は金澤の人、年三十五、少時齒科醫菊池氏の門に學ぶこと五年、二十九年京都に於て、齒科醫術開業試験に合格し、三十三年を以て米國に遊學し、サンフランシスコにありてドクトル、チエース氏につき研究すること二ケ年に及べり、三十四年十二月歸朝、其業を開き、門戶の盛、他に比なしと稱せらる。

君夙に齒科醫養成の急を唱へ、同志と謀り、其教育機關を設けんとするの志ありしも、儕輩徒らに營利是れ力め、是れ等根本的大問題に耳を傾くるもの少なし、君奮然蹴起、私費を抛ちて京都齒科學校を起し、自ら校長と講師とを兼ね、忙中閑を割きて熱心に學生を教養しつゝあり、關西の地にありて齒科學校を

設立せしもの君を以て嚆矢とす、着眼時流に卓越し、而も其志操堅固なるものにあらずんば、蓋し能はざるところなり。

本年七月萬國齒科醫學大會に臨席、大に其蘊蓄を吐露し、日本齒科醫の爲に氣を吐くこと少なからざりしと云へり。

君は熱心なる佛教信者にして、品行方正を以て知らる、其唯一の嗜好として音楽あり、又詞藻に富む。



女 醫 村 上 琴 子 女 史

大阪市東區北濱二丁目

女史大阪の商家に生る、明治三十一年九月大阪慈惠病院醫學校に學び、三十三年五月に前期試験を、三十五年十一月に後期試験を受け登第す、産科婦人科及び小兒科を専門とし、緒方正清博士につきて實地研究をなす年あり、門下の才媛として知らる、然れども未だ之を以て安んぜず、三十六年九月上京して東宮侍醫長田氏に親炙して小兒科を修め、翌年大學病院小兒科長廣田氏に従ひ修練す、同年末歸阪し、再び緒方婦人科病院に入り、専心講究を怠らず、篤學にして殆んど倦むことなし、四十一年四月を以て北區堂島舟大工町に其門戸を張りしも、本年祝融の災に罹りて現所に假診察所を開きつゝあり、資性甚だ謹直

温良診察の懇切周到なるを以て聞ゆ、門戸日に盛なり。



正六位
醫學博士

大阪高等醫學專門學校教諭
楠本長三郎君

大阪市北區老松町一丁目

群英芳を競ひ、絢爛の美を織り成すもの、之を大阪高等醫學專門學校の現状と爲す、其外形は尙ほ地方の一専門學校たるに過ぎざるも、實質は既に堂々たる單立大學とも云ふべく、將來單立大學制の布かるゝあらば最先に其旗幟を樹つるもの、蓋し本校なるべし、規模の雄、組織の完全、全く専門醫學校中の覇者にして、教授の任にある人、皆新進氣鋭、京都醫科大學の以つて一敵國視する、正に故あるべく、此の盛名の中に立ちて内科醫長の重任にあるものを、楠本長三郎君とす。

肥前の人、明治四年一月を以て西彼杵郡七釜村に生る、家累世醫を以て業と

す、明治二十九年七月第一高等學校を特待生として卒業し、東京醫科大學に入り、三十三年十二月を以て又特待生として之れを卒ゆ、翌月大學助手となり、其大阪高醫の教諭兼内科醫長となりしは三十八年四月とす、翌年三月獨逸に出張を命ぜられ、研究を重ね十一月を以て歸朝、本年十二月論文提出によりて醫學博士の榮號を得たり、巽に坪井速水氏内科を以て學位を得、今又君之れに次ぐ、高醫の双壁と云ふべし。

君、大學助手時代より既に内科學者として知られ、著書多く「鳴氏内科書」の翻譯の如き、意義の透徹と、行文の流暢とを以て聞け、君が誠量を示すに足る、好個のものたり、其講壇に立つや必ずしも其辯の雄を以て稱し、能はざるも、學殖の深遠と、解説の周到とを以て現時日本に於て第一流と目されつゝあり、而して單り講壇の人としてのみならず、臨牀家としても夙に大阪杏林に單出するものあり、是れ其天稟の才と、蘊蓄の大とに加ふるに、一種犯すべからざる膽氣を以てするもの、他の瘥かに企及し得べき所ならず、特に君に於て稱すべきは、生平泰西の醫書に親む、傍眼を皇漢醫學の古書に曝らし、苟も取るべき長點を

看取せんか、些微のものゝ雖も決して看過せず、忽ち研究の資料と爲すにあり、其特誠にして應用の妙、決して偶然にあらざるなり。

往年、栃木縣下に鑛毒病問題起り、天下の物議を惹起するや、専門家の研究に身を委ぬる者少なからざりしが、之に關して衛生上の見地より爲せる君が大論文は、専門家の注意を惹き、多大の價值あるものとして迎へられ、又獨逸留學時代にありても、斯學の大家として少なからざる敬意を拂はしめたるものありと云へり、以て其學殖の如何を證するに足るべし。

資性沈着壯重にして謙讓の徳に富み、寧ろ學壇の人として適するを見る、君亦一身を研究の爲に捧げて倦まず、當世醫人の中にありて最も諄なるものといふべし、其の學生に對するや甚だ懇切を極め、且其人格態度、自ら欽慕の念を禁じ能はざらしむるあり、前年東京濟生學舎の閉鎖せらるゝや、數千の學生其方向に迷ひ、識者の憂慮するところとなりたる時、後進の提撕に熱き君は一片の義氣より挺身勞を厭はず、其後繼として設けられたる校舎にありて無報酬にて教授の任に當りたることあり、知る人深く君の徳を稱せざるは無かりし

又世の開業醫にして至難の治療に際會し、氏の助力を求むることあるや、毫も
隔心の狀なく、其教示に吝ならざるが如き、多く見ざるところ、其氣格思ふべし
今次の博士論文に就ては、未だ其内容を聞くを得ずと雖も、篤學君の如くに
して、而も多年の研鑽を以てす、其斯界を資益する大なる大産物たるや、言を要
せず、高醫の君を有する、眞に錦上花を飾るの風趣を存すと云ふべし。

此に小照を掲ぐる
能はざりしは君の
謙遜にして往訪の
記者に對し其交付
を肯ぜざりしに因
る

大阪精神病院長

山本宗一君

ドクター
メザチール

大阪市南區達阪上ノ町

君が家世々醫たり、父君は洪輔翁と稱し、舊越前藩醫たりしが、後北海道開拓使醫官として任に宗谷にあり、君明治六年十月一日を以て此處に生る。

醫道が日本新文明の先驅となり、泰西の文物が刀圭者流の手を通じて移入されたる關係上、維新の革命にも我醫家の貢獻するところ、決して尠少ならざりしが、當時一塊の功名心は、長袖を脱して自ら政權に干與せんと争うて浪士の群に投せしむる多く、林薫、渡邊洪基、芳川顯正、青木周藏等、鐵中の錚々たるもの、克く其目的とするところを達するを得たるが如し、君が乃父亦た此類と等しく、天下の志士をして國事に奔走し、土藩の名士阪本龍馬の知遇を得て海援

隊に屬し、長州征伐時代には馬關海峽に於て名譽の戰師に従事し、引續き海軍に従事しつゝありしも、病を得て任を辭し、本業に復したるなりと云へり。

君生れて二歳、父君と共に大阪に來る、長ずるに及んで大阪中學校を卒へ、京都同志社高等科に普通學を修め、二十八年第三高等中學醫學部を卒業し、二十九年九月を以て東京醫科大學助手を拜命し、故榊博士、吳博士に師事して、精神病學を研究し、居ること一年、三十年八月歐洲に航し、獨逸に在りて精神病學を研鑽し、「ドクトルメヂチーテ」の學位を得て、歸來現地に開業す、大阪癲狂院は實に父君洪輔翁の開く所にして、我が大阪にありて精神病の専門に獨立したりしは實に此の病院を以て創始と爲さるべからず、元來精神病の治療は市塵熱鬧の中にありては到底理想を完ふする能はず、故に都會に近き郊外にありて、而も交通の便利ある土地柄を卜して以て、始めて神経病と精神病の療養に併用するを得べく、特に本病院の建築は、國家衛生上亦必要なりとは洪輔翁の夙に高唱する所なりき、故に君の嶄新の學理と治術とを加味して一層院の設備を完全にし、更に進むで天王寺逢阪の邊、空氣清淨にして閑靜なる處にッ

井ラー式病院を起すに至れり、宛然小公園の觀ありて一種の雅味を帯びたる
ところ、腦神經精神系病者に精神的慰安を與ふるに必適し、其設備眞に理想に
合すと云ふべし、世の營利本位を以て此の憐れむ可き喪失者を奇貨とし、陋態
を演じつゝあるもの等、須らく反省せざるべからず。

君、資性緻密寡言、嗜好としては主として讀書あるのみ、頗る明快なる頭腦を
有し、強記にして意思も亦堅實、又た甚だ友誼を重んず、曾て君の友人某、當地に
開業するや、門戸甚だ振はず、君屢々訪うて之を慰藉し、且之れが經營を助け、其
の患者の來りて診を求むるものゝ加はるを見ては、我の事の如く喜びつゝあ
りたりとなん、其性格は此の一事に現はれ、眞に床しき限りと云ふべし。



京都帝國大學京都醫科大學教授
從六位
醫學博士
松岡道治君

現下日本に於て外科學の泰斗として推すところのものは、蓋し二三に止まらざるべしと雖も、整形外科を以て一家を爲すものを舉れば、京都大學の松岡博士と東京大學の近藤博士にして、以て東西の二壁と爲し、松岡博士に至つては實に神品の評あり。

其講堂に立つや、眞摯の口調を以て一言一句を苟もせず、淳々として説き會得せしめずんば已まず、學問藝術の上に於てのみならず、其の人格高潔にして人の師表として尊敬を拂ふに足る、以て京大の一明星と爲すべし。

明治四年十二月を以て北海道北見國禮文郡香保村に生れ、二十六年高等學

校の業を卒へて東京帝國大學醫科大學に入り、三十年十二月卒業、三十四年三月帝國大學醫科大學助教授となり、三十五年八月整形外科學研究のため三年間獨逸國に留學を命せられ、留學中三十八年七月醫學博士を授けられ、三十九年五月歸朝して、整形外科學講座を擔任しつゝありしが、四十年五月京都帝國大學醫科大學教授となりて、整形外科學講座を擔任して今に及び、日本に於ける開發、君の功に負ふところ多しと云へり。



京都帝國大學京都醫科大學教授
醫學博士 松浦有志太郎君

熊本縣の人、舊字工藩士たり、慶應元年十一月を以つて産る、明治二十一年第一高等中學校を卒へ、進んで東京帝國大學醫科大學に入り、二十四年特待生となり、其翌二十五年之を卒業す、越えて三十二年皮膚病梅毒研究の爲め獨逸に留學を命せられ、居ると三箇年、三十三年京都帝國大學京都醫科大學助教授に任じ、三十五年十二月京都帝國大學京都醫科大學教授に擧げられ、爾來皮膚科の講座擔任たり、其の醫學博士の學位を授けられたるは三十七年の四月にして、本年七月又從五位に叙せられたり。

君の皮膚科に於ける、深遠なる學識と、高邁なる手腕とは、克く京大の重鎮た

る聲望を博し、遂かに東大に據れる土肥博士と對して、斯界の二大星斗たり。其の講堂に立つや、緻密なる頭腦を開いて出づる講述は、説き去り説き來つて頗る難解至難の評ある新科をして、實に平明直裁のものたらしめ、學生を引いて容易に之を會得せしむるに至らしむるところ、眞に一偉觀とすべし。

君は純正の學者肌にして、謹嚴高格、一點犯すべからざるものあり。年四十有四。



正六位
醫學博士

京都帝國大學京都醫科大學教授
松 下 禎 二 君

俠氣滿々、霸氣勃々、深遠なる學殖を其の大脳皮質中に藏め、綽々として猶且
餘裕ある、新氣進銳の博士を京大の松下禎二君となす、君は濟々たる群才が千
紫萬紅を一時に咲き亂したるが如き一大壯觀を呈せる京都醫科大學教授中
にありて、年少の篤學者として多大の敬意を拂はれつゝあるも亦偶然にあら
ざるなり。

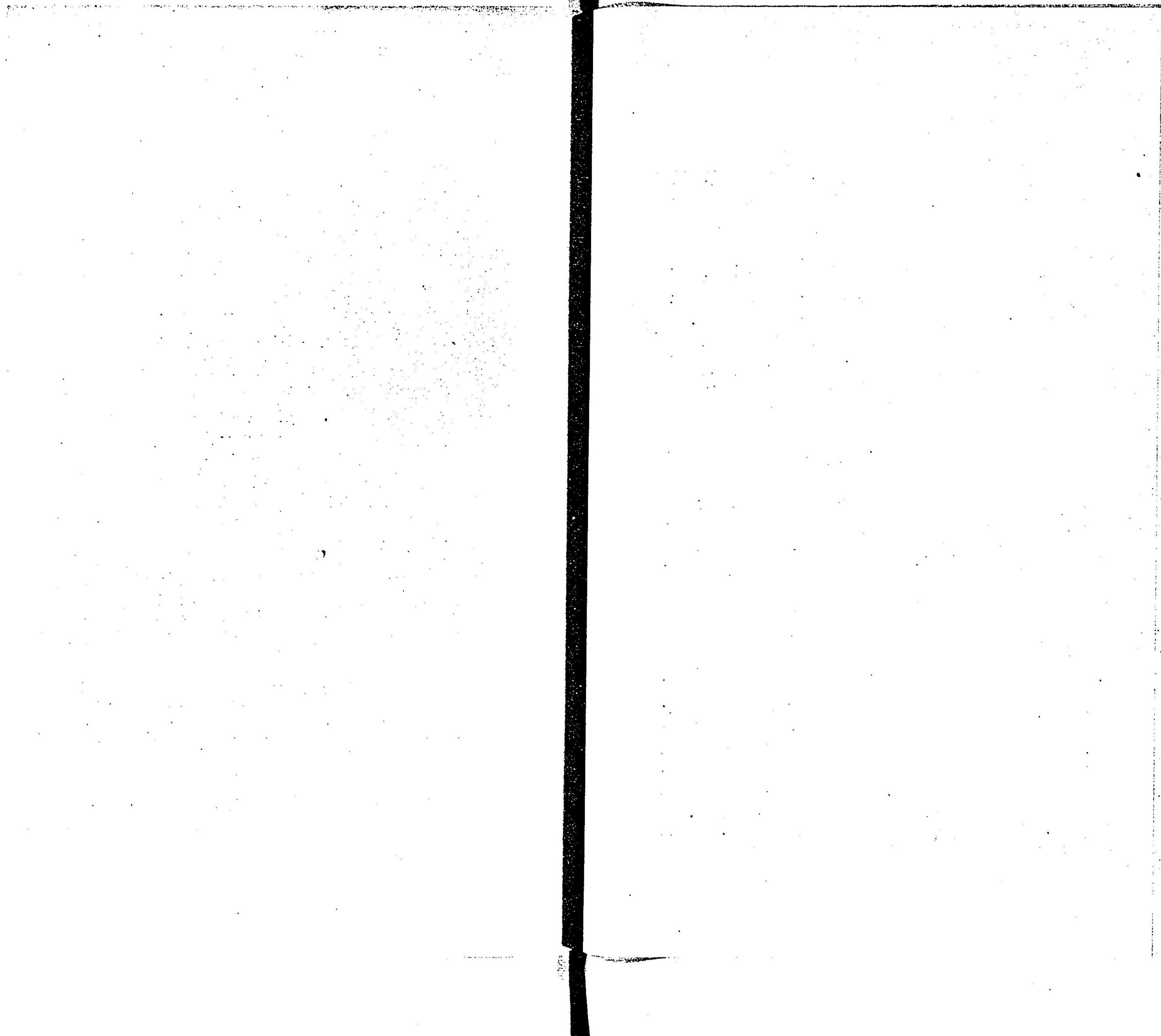
君は明治八年六月を以て鹿兒島縣薩摩郡高城村に生る、松下文一氏の次男
たり、廿七年第五高等學校醫學部を卒業し、三十年私費を以て獨逸に渡航し「
フライブルグ」「ギーゼン」「ハルレ」「ブローヌスラウ」の各大學に於て醫學殊に

衛生學及び細菌學を專攻し、動植物、物理學、地理學、心理學、倫理學、哲學等を兼ね修め、ドクトルメヂチ及びドクトルフイロソフイーの學位を享けて三十五年十月を以て歸朝す。卅六年醫學博士となり、京都帝國大學京都醫科大學教授に任せられ、衛生學講座を擔任したるは三十六年十月の事なりき。越えて四十年七月第十四回萬國衛生會議に出席し、大に我が學界の爲めに氣虹を吐きぬ。四十一年二月正六位に叙せられき。

君が雄邁にして不屈的非凡の精力家たるは、曩に私費を擲つて歐洲に航し、苦學幾年、其の研學の多方面にして、偉大の獲物を積み重ねたるに之を證すべし。而してその蘊蓄涵養は凝つて一大論文となり、飛龍昇天の勢は一得業士の身を以てして一躍博士の榮號を贏ち得たり。時に年纔に二拾有九、而も學者の淵叢たる京都帝國大學京都醫科大學に入りて教授となる。篤學精勵君の如きは洵に斯界に於て空前の異數事に屬す。其の君が京大に教鞭を執りてより以來、衛生學上に貢獻したる功蹟や、又顯著にして偉大なり。傳へらるる國家が君を優遇する亦宜べなりと謂つべし。借問す、彼の豊富なる官費を得て、笈を三千

里外に負ひ、伯林城頭電燈影暗く、柳條畑つて夢の如き處、私窩子の懐に睡る留學生輩此の年少氣銳の篤學者松下博士に鑑みて慚死するの感なき乎。

君は卒直飾りなき側面に於て、聲利に淡なり、否寧ろ聲利に遠きの人なり、未來に富める君を今日に於て評隲するは、或は時機の宜しきを得ざるものあるべし、然れども滔々時弊に陥れる現代の刀圭界に對し、この崇高なる人格を紹介するは、蓋し好個の對症劑たらずんばあらず。





陸軍三等軍醫正
正六位勳四等

前田龍君

大阪市北区天満橋筋二丁目五五

伊勢宇治山田の人、萬延元年を以て生る。

明治二十七年日清戦争の正に酣なるの時、陸軍三等軍醫に任せられ、即日南部兵站監部附として出征し、翌年十月宇品に歸留し、東京陸軍豫備病院にありしが、二十九年一月臺灣憲兵隊附となり渡航し、三十年十月二等軍醫に陞任し、三十二年八月迄各種の任務に服し止まること四年、後一等軍醫に上りて福島衛戍病院附となれり、三十七年日露戦役の起るや、其四月十六日を以て動員の下令と共に第十師團衛生隊附として出征し、六月十五日清國南尖嶼に上陸以降戦地にあること一年有餘、三十八年七月留守第十一師團司令部附となり、内

地に歸還せしも、直ちに同師團第四野戦病院長となりて再び大連に渡航し三等軍醫正に陞任、翌年一月騎兵第十一聯隊附となり、復員下令と共に凱旋し善通寺なる同隊附豫備病院長となれり、其休職となれるは三十九年八月にして翌年三月豫備役編入今に及べり。

兩次の出征及び臺灣討伐の功により、行賞されたるものを擧ぐれば、二十九年二月に日清戦役の功によりて勳六等瑞寶章并に金百圓を、又た三十年四月臺灣に於ける軍務によりて金九十圓を而して近く日露戦役の功績に對しては、三十九年四月を以て旭日小綬章及び金貳千圓を賜はりたり。

君、寡言黙行武人としては先天的好個の資性を備ふるのみならず、剛直にして頗る清廉潔白、且義氣に富み、善く子弟を撫育し其教育に怠らず、又和歌に巧なりと云ふ、風懷襟度、以て想見すべし。



大阪市立桃山病院長

醫學士 増山正信君

大阪市東區平野町一丁目

趣味ある前生涯

桃山病院長として、一意傳染病の治療に従事し、自ら名聞を求むるに意なくして、而も盛譽大に揚れるもの、是れを増山君となす。

君は明治元年四月、東京市小石川區水道町に生る。君の九世祖は徳川氏に仕へて外科御番醫として聞えしが、後三世に至り法玄に叙せらる。君の父正直氏に至り、時恰かも明治三年、將軍慶喜公の大權を奉還して野に隱退するに際し、正直氏乃ち公に隨うて靜岡に至る。後十二年感ずるところあり、醫を廢して實業界に投じ、安田銀行に入りて一時第三銀行大阪支店長たりしことありき。増

山君年甫めて十二、東京に在りて普通學を修め、本郷獨逸學校を経て第一高等學校に入り、二十四年進んで、東京醫科大學に入る。二十八年卒業するや、博士青山胤通氏の内科助手を勤め、傍ら醫術の研究に熱中して、醫術界の難症と稱せらるゝ、糖尿病治療法に就き、大に得るところありしと聞く。

獨逸留學時代に於ける君

越えて三十年六月、獨逸に留學し、伯林大學に入りて内科學を究め、又ハイデルベルグ大學に轉じて同じく内科を專修し、後フランクフルト(バーター國)に到りて日本人の未だ見知らざる各地病院の狀態を探究しつゝありしが、偶ま某私立病院長の識るところと爲り、四箇月間同院に留まりて熱心に内科の研究に従事せりき、更に又ザリヤン國なるウエルツナルクに遊びて同地の大學に入り、二年間にして業を卒ふや、復び伯林に遊び、歸途巴里を経て英京倫敦に入り、三十三年一月を以て歸朝したり。

歸朝第一歩の活動

君の歸朝するや、名聲大に聞ゆるどころあり、終に聘せられて神戸市東山病

院長となりしが、當時ペスト病の流行期に際し、大阪市に於て、該病院の建設せらるゝや、其十一月を以て、桃山病院長として就任したるが、荏苒以て今日に至りぬ。

君の専門學に關する論文として従來世に發表せられたるもの左の如し。

- (一) 卵黃中に於て「インマルトーゼ」に就きて
- (二) 脾臟糖尿病に脾臟を應用せる一例
- (三) 「アドレナリン」糖尿に就きて
- (四) タカヂアスターゼに就きて
附傳染病との關係
- (五) ナスチン尿の一例に就きて
- (六) 痘瘡患者の血液
- (七) コレラ患者の血液
- (八) コレラの一二症候に就きて
- (九) 糖尿病に於ける食餌療法に就きて

- (十) 糖尿病療法 の 追 補
- (九) 急性傳染病と糖尿病の關係
- (八) チアチアプスにヒラミトンの應用に就きて
- (七) 尿管放症に就きて其療法
- (六) 赤痢と脚氣
- (五) 明治三十八年の大阪流行ペストに就きて
- (四) タカチアスターゼに就きて第二報
- (三) 小兒ペストに就きて
- (二) 日本に流行せるペストに就きて

人物と性行

君性豪放不羈なるが如きも、其の一面に於ては細密の用意を失はず、殊に其専門の研究になる傳染病に對しては熱誠忠實を以て其任務に當り、友人間爲めに稱贊せざるものなしと傳へらる。君は又雅量宏懷の人にして、部下の統御に一長所を有すとの事なり。



ドクトル
メサチー子

松本需一郎君

大阪市東區高麗橋筋二丁目

我が大阪市に於て泌尿生殖器科最初の専門醫として、又近く獨佛英の遊學を了へて歸朝したる元博愛病院長松本君は、兵庫縣丹波國氷上郡沼貫村の人。文久二年十月二十七日を以て生る。父は節齋翁、嬰鑠今猶世に在り。君は其一粒種の秘藏兒にして、幼より父の慈愛最厚かりき。其十一歳の時始めて大阪に來るや、叔父松本俊平の許に教養せらる。明治九年、十五歳に及んで大阪英語學校に入學し、同校の専門學校と稱せられて十四年、廢校となるや退學す。越えて十九年、二十五歳を以て東京に遊び、醫科大學別科に入りて専心攻究し、二十二年二十八歳を以て卒業す。後郷里に歸りて開業すること一年なりしも、轉じて攝

津灘御影に移り、此地に業を營むこと六星霜、明治二十九年の秋、再び大阪に來りて大阪慈惠病院醫學校講師となり、翌三十年二月、東區横堀に開業せしが三十二年春、西區新町通二丁目に於て私立博愛病院を設立し、患者陸續、門戶殷盛を極めしも、四十一年八月、學術研究の目的を以て歐洲遊學の途に上り、同時に病院を閉鎖したり、而して君の歐洲に在るや、先づ獨逸ライプチヒに於てコールマン Kolmann、トレンヂレンブルクと Frankelburg、オリーハ Rille、氏に従ひて泌尿科及び花柳病學を專修し、四十二年九月、名譽ある學位を得て歸途南獨逸、佛蘭西英吉利を遊學視察し、西比利亞を経由して同年十一月歸朝したり。

君の大阪に在りて門戸を張るや、其學術の非凡なるを、患者に親切なるに於て夙に聞ゆるところありしもの、而して今や歐洲に在りて其獨特なる泌尿科及び花柳病學を攻究研鑽して歸る、其技の更に大に熟したると共に、醫學上又大に貢獻する所あるべきを信ず。



醫學得業士

松山爲雄君

京都市上京區新町御池上ル仲之町

君は福井縣の人、明治三年を以て敦賀町に生る。

明治十八年第四高等學校醫學部に入り、二十二年七月之を卒へ、京都療病院に助手として勤務、外科を専攻し、後京都高等醫學專門學校教授に任せられ、病院外科部長を兼ね、三十五年辭職して現今の居所に其の業を開けり、今京都にありて門戸を張れる醫家決してひなからずと雖も、外科の術に至りては先づ君を推すといへり、其技能の優秀なる、以て見るべく、今日の地位を贏ち得たるは決して偶然にあらず。

君深く英獨の語に通じ、詞藻に豊に、且資性温厚篤實を以つて知られ、患者に

對し同情に富むを以て門戸甚だ盛に而して醫生の教養を以て一種の樂となし、薰陶至らざるなき爲め人望甚だ高しと云へり、前途尙春秋に富む、進展更に大なるものあらん、京都杏林の一人物とすべし。



醫學得業士

松山松平君

大阪市四區立賣堀南通一丁目

君は現に私立大阪産婆學校長たり、東成郡産婆會長たり、また大阪市産婆會講師、西成郡産婆會講師たり、産科婦人科専門の醫家として産婆養成の衝に當る、當然の責務なるが如しと雖も、君が如く多年勵精斯の事に従ふ、其勞や多とすべく、其功や偉なりと云ふべし。

明治二年十一月熊本市城東に生る、十年西南役に兵火に遇ひ、難を木山町に避け、爾來同所に永住す、家素細川家の藩士たり、明治十七年熊本市匠小路觀象校に入り漢學を修め、明治十九年熊本縣立甲種醫學校に入學す、次で第五高等學校醫學部の長崎に設置せらるゝや、學校より同部に轉校を命ぜらる、後、明

治二十二年秋大阪高等醫學校に轉じ、二十七八年日清戰役の時業を卒へ、吉田病院に産科を研究すること三年に及び、明治三十年を以て開業せり、其經營に成る大阪産婆學校は、創立以來本年に至るの間三百三十有五名の卒業生を出せるが、同校は明治二十年十二月、養父耕造君が専門家を計り、大阪府の認可を得て設立したるものにして、實に大阪に於ける産婆學校の嚆矢たり、是れ亦斯界の一大恩人と云ふべし。



醫學得業士

政 山 龍 雄 君

大阪市北區安治川通南二丁目

二十餘貫の胖体を提げて、往診に宅診に日々寸間の暇なく、十有餘の會社の
囑託醫となり、其名聲噴々たる私立政山病院長政山龍雄君は、明治九年四月を
以て鳥取縣鳥取市に生る、父は其名を龍秀翁と云ひ、醫を以て業とす、君は實に
其長子たり、年少東都に遊び、獨逸文學研究の目的を以て、先づ獨逸協會に入り
五年の後優秀の成績を以て卒業し、後第一高等學校第二部に入學し、將に一箇
年にして大學文科に入らんとするに際し、不幸病魔の爲め廢學するの止むを
得ざるに至り、涙を吞んで空しく故郷に病臥すること一年、天未だ有爲の君を
捨てざりしか、幸にして再び健躰に復し得たるが、此時に至り嚴父の勸めによ

りて其目的を變じ、將來醫家として立たんと決意し、金澤醫學專門學校に入學し、明治三十一年十月好成績を以て卒業す。時偶々外科の泰斗木村孝藏君教諭兼外科醫長としてあり、君深く其知遇を受け、同病院外科の助手として勤務する。と一年半、此間君の外科術、泌尿生殖器科に於ける手腕は、博士及同窓間の大に賞揚せし所たりしと云ふ。

明治三十四年三月大阪に來りて北區安治川南二丁目に開業し、後三年にして一大病院を建築し、以つて現今の隆盛を來すに至れり。君爲人卓落學術に忠にして人格また高く、克く後進者を愛す。故に一度君の門に入りたるもの、深く君の徳を感佩せざるはなし。英獨の語を善くし、尙ほ甚だ春秋に富むを以て、前途の進境夫れ期して待つべき乎。



正五位
醫學博士

京都帝國大學京都醫科大學教授
藤浪鑑君

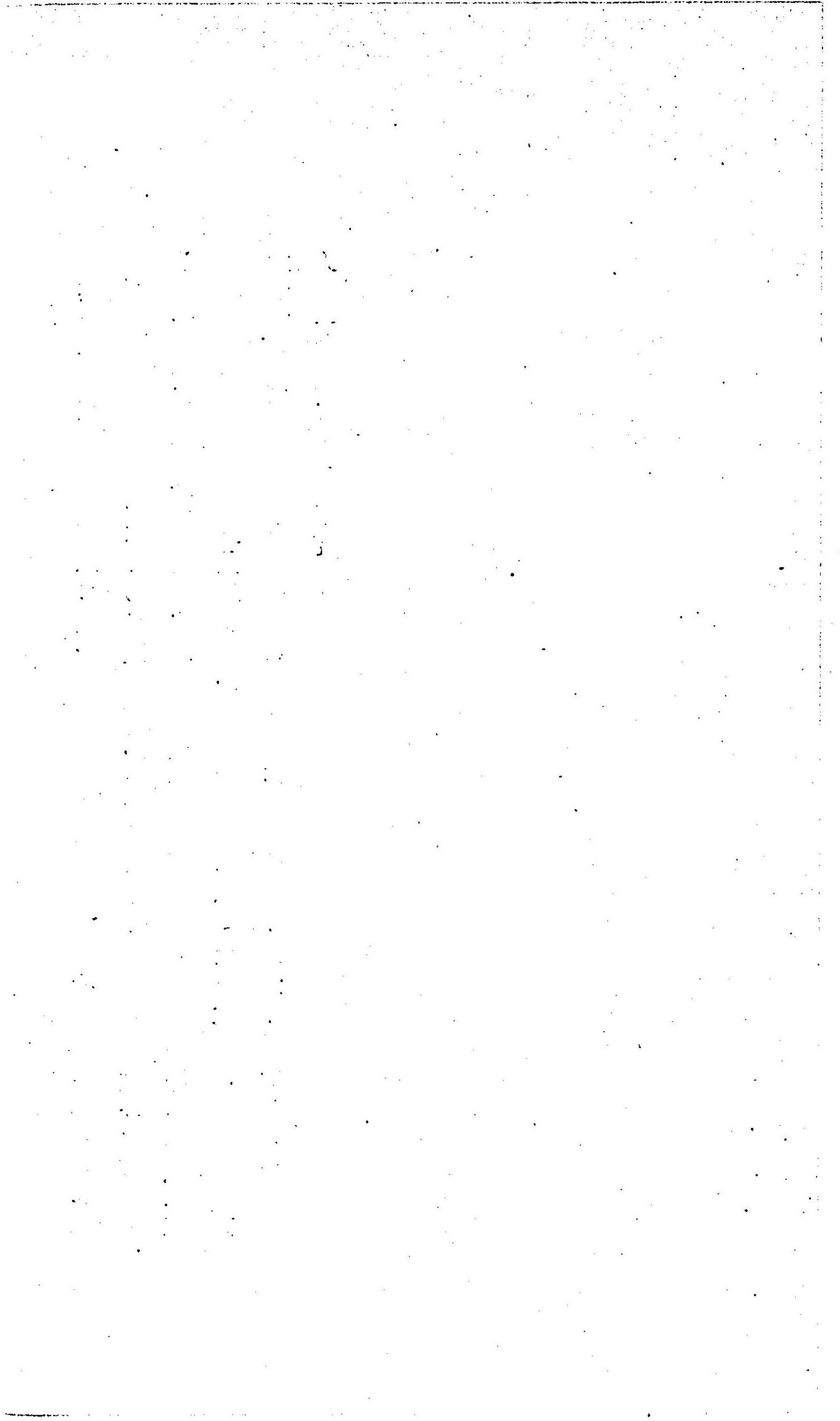
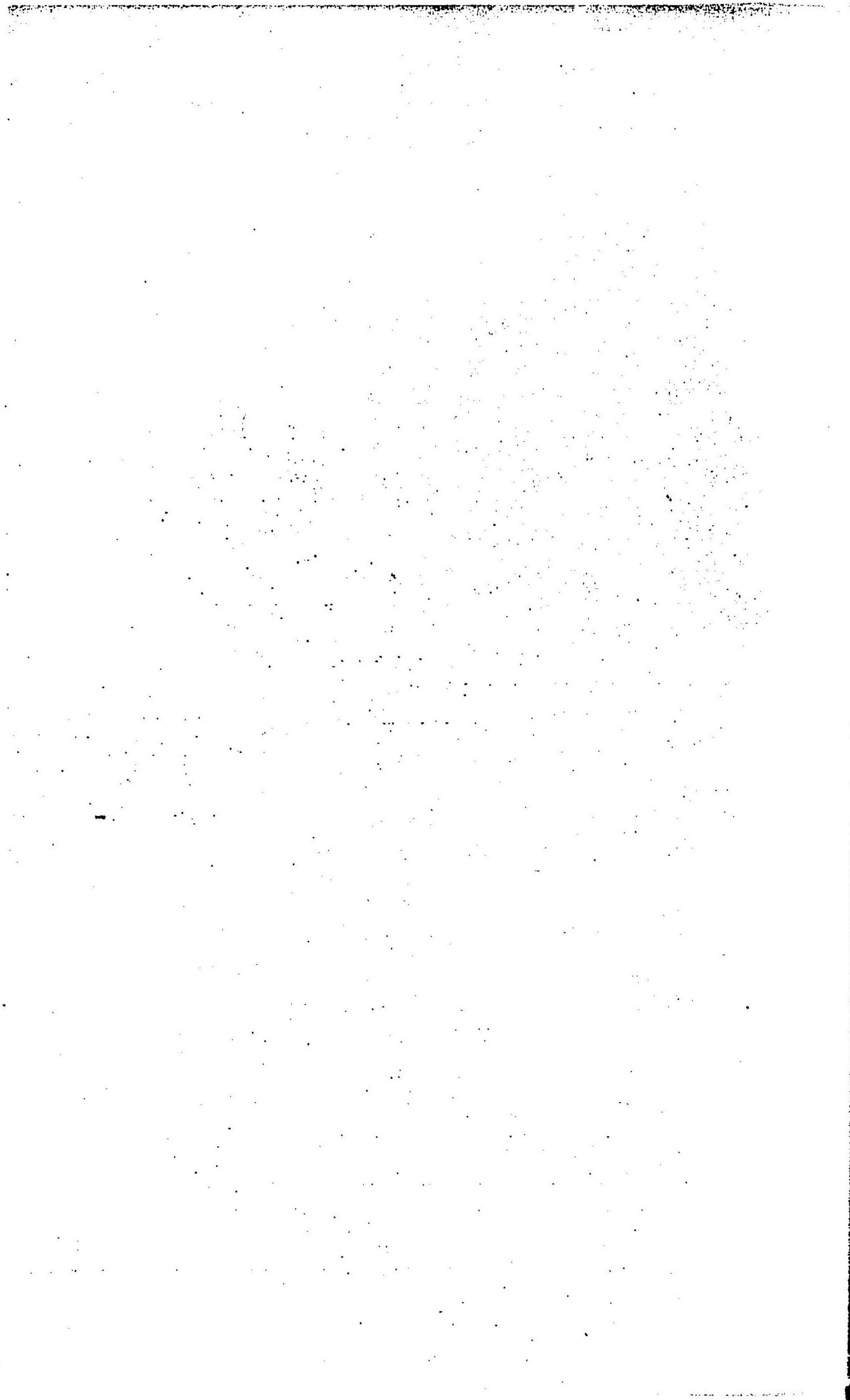
現今の醫界に於て病理學の泰斗として推さるゝもの四五を數へ得べしと雖も、其の最も著はるゝもの、東京の北里、京都の藤波二博士とす、特に新智識に於ては、藤波博士の寧ろ北里博士に優れるものありとは、斯界の通評なれば、君を以て現時杏林隨一の病理學者と爲すも可なり。

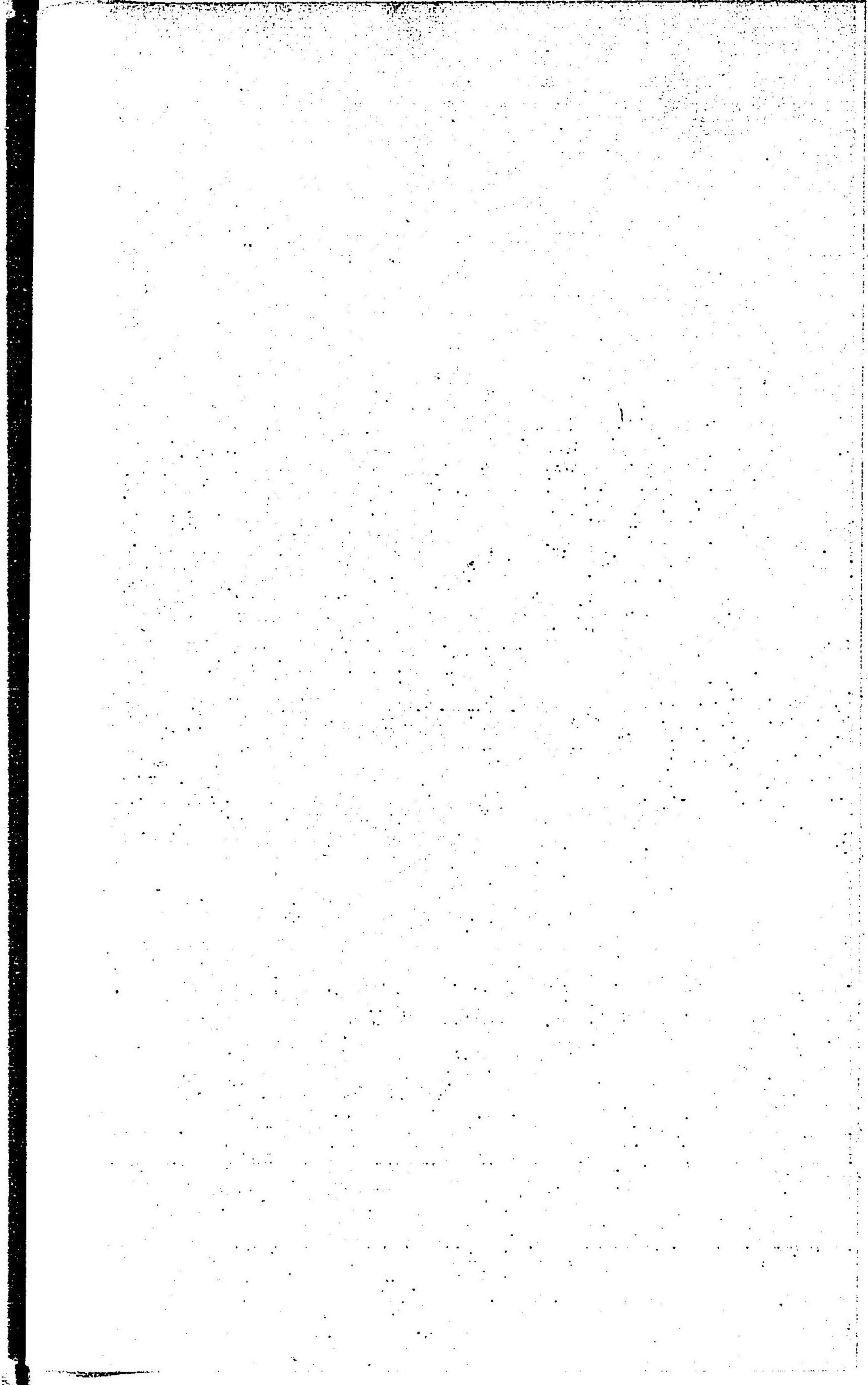
名古屋の人、明治十七年を以て東京醫科大學豫備門に入り、二十八年十月醫科大學の業を卒へ、二十九年一月を以て大學院に入學したるが、同年七月獨逸に遊學し、留ること一年有餘に及ぶ、其京都帝國大學京都醫科大學教授となるは、三十三年にして、病理學講座を擔任し、三十四年を以て醫學博士となる。

雅懷宏量、帝國最高學府の教授として人格また備はり、單に病理學者として一頭地を抜くのみならず、和漢洋の典籍に通じ、博覽強記罕に見るところにして、古今の名句殆んど暗誦せざるはなし、居は吉田山の東麓にあり、衣笠山の翠綠呼べば應へんとするところ、時に映入の唐本を繕き、美的觀念の修養に餘念なきものゝ如く、日常血腥き解剖臺に親むとして、は能く心身の調和を維持するに力むるものと云ふべし。

曾て云へり、屍体解剖の如き、或る意味に於て慘の慘なるもの、たゞ學術上の貢獻を期して敢て此の慘事を行ふも、屍体に對する禮を厚ふべきは勿論、能ふ限り慘憺たる狀況を避けざるべからずと、京大病理學剖檢室の統計は、此趣意よりして君の設計に成り、毫も不快の感念を起さしめざる一大特色を有せり、而して剖檢室中備付けられたる大理石の解剖臺は、其私財壹千圓を投じて寄附せしものに係れり、今の時温情斯くの如き學者を求めて多く其類例ありや、此の由緒ある解剖臺は、京大の存せん限り、好個の紀念物として君の名と共に不朽なるべし。

其の講議振りは通常人と趣を異にし、乾燥無味なる理論の間に交ゆるに華麗の詞句を以てし、學生をして毫も倦色なからしむるのみならず、諄々會得せしめずんば已まず、其の精力主義なる所、人皆感奮せざるはなし、志操堅實、嚴正公明にして、漫りに情實蚤縁に動かされず、彼の學位請求論文提出者の如き、京大教授會議に於ける君の一言に依りて休戚の岐るゝが如く感ずと云へり、爲人の一斑以て察すべし。







私立福井病院長

ドクトル
メサチー子

福井繁子女史

大阪東區平野町二丁目

我關西に於ける杏林名家の數、枚擧するに遑あらずと雖も、悉く皆男性たり。然るに身は懺弱き女性を以て、萬里の異郷に留學し、刻苦螢雪の功を積み、終に名譽あるドクトル、メサチー子の學位を擔うて歸るもの、之れを福井繁子女史なりとす。

女史は岡山縣久世の人、明治七年一月を以て生る。父は貞一郎翁、碩儒を以て聞ゆ。女史は其長女なり。女史幼にして久世小學校に學び、傍ら家嚴を師として漢學を修め、二十三年三月東都に上りて濟生學舎に入り、二十六年業を卒るや、年纔かに二十才、而して一躍して醫術開業試験に及第す。後大阪に來りて婦人

科の泰斗博士緒方正清氏の助手となり、同婦人科病院に在りて六年間研究に従事す、其學術に忠なる、同窓男醫をして顔色なからしむるものありき、幾もなくして、東區伏見町に一戸を構へ、六年有餘の間獨立開業せしも、當時肥前島原の一女性にして歐洲に遊學し、ドクトル、メヂチーチの學位を得て歸れるものあるを聞き、女史此に大に感奮する所あり、三十八年九月終に獨逸マルブルヒ大學に遊び、斯學の泰斗たるプロフェッソル、チビッツ氏に學び、後ヂツセルトル市の病院に於てスチツケル氏に學び、大に得るところあり、越えて四十一年六月、ドクトル、メヂチーチの學位を得て歸朝し、現所に於て開業したり。

女史は有名なる精力主義の人にして、醫術に關する研究の如きは殆んど寢食も忘るゝの狀ありと云ふ、女史は又平生質素にして、勤儉力行を以て自ら持せりと稱せらる、女史は殊に語學に通じ、絶わす之れが研究に心を用ふる傍ら文學的作品を愛讀すと聞く、以て其人物の一斑を想像するを得んか。

君は往訪の記者
に對し謙讓以つ
て小照の交付を
許さざりき

私立濟世病院長

小林參三郎君

ドクトル、オブ
メヂカル、シン

京都市下京區清水下三丁目

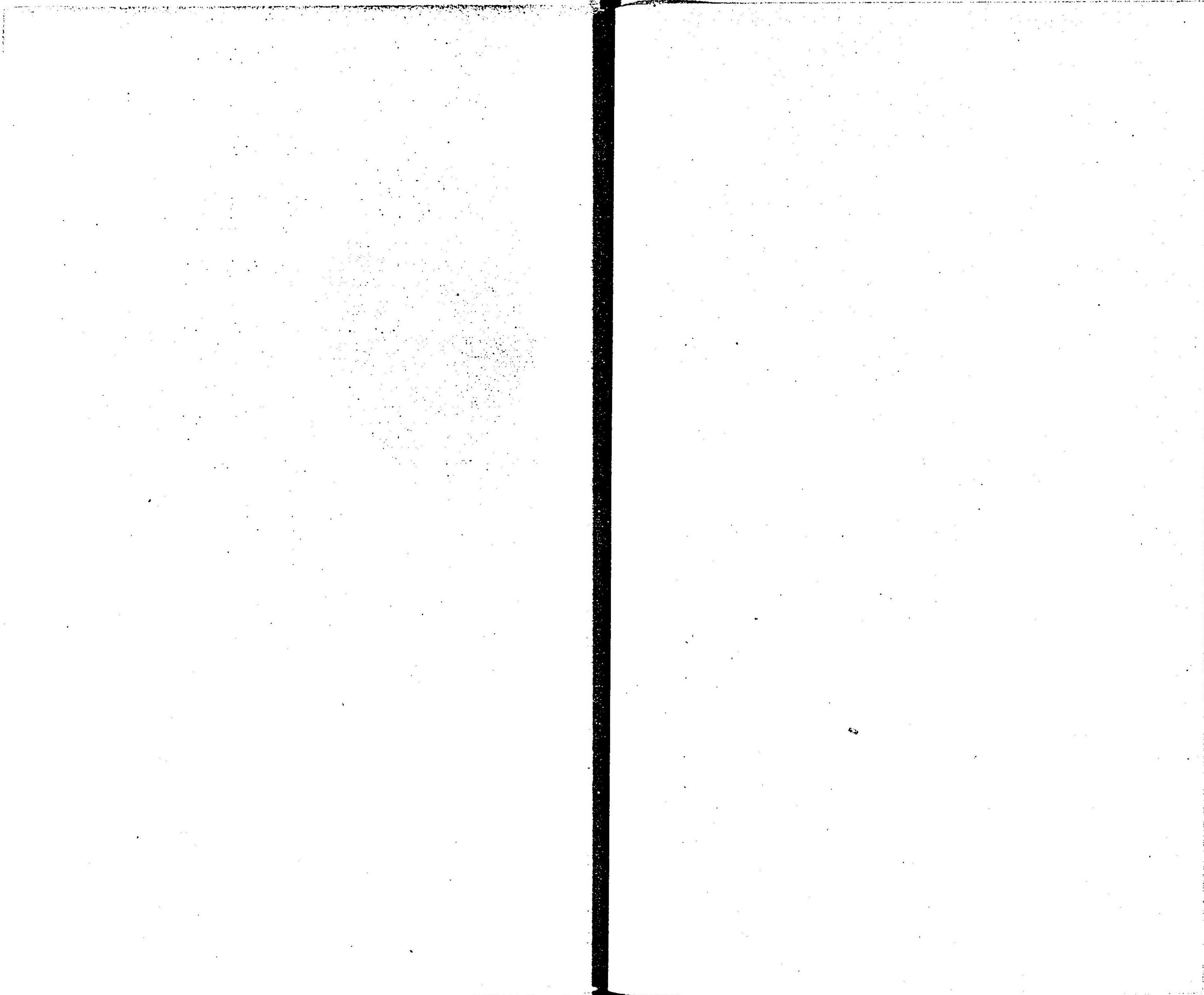
今秋九月、京都は東寺の境内、市塵揚らず、風色特に澄蕩なるのころ、濟世救民を標榜せる慈善的施療の一仁院は開かれたり、私立濟世病院は之が稱呼にして、參三郎小林君は即ち其の院長たり、君語りて曰く、醫は仁術ならざる可からず、何ぞ現代に於ける醫弊の太だしきや、予が本院を創設するに至りたるもの、實に此概念に因す、敢て範を垂れんと云ふに非ず、唯夫れ醫士としての天職に向ひ、其の使命に對して、予は予の最上^{ベスト}を竭すにある耳と、恁して君は慈仁圓滿の瞳を放つて、何人の來り療を求むるあるも、擇んで之を診し、些の厭倦あるなく、又好んで手術料、藥價等を收むるなし、而も人の自ら進んで之を收めんと

するや、所謂心任せにして無記名状袋封入の上金庫中に投せしむ、時流の眼より以てすれば規定甚だ奇に似たりと雖も、君の主義信条は此の一規定に稽ふ可らずや、君は又曰く、薬價を定め、手術料を云爲するが如きは醫士として廣義の上に於ける不徳也矛盾也、と美なる哉言や。

君の將來の理想として期待せるは、普く弘く不幸無告の下層病民を醫癒せしめ、其の天命を樂しましむるの大慈善、大手術を行ふの施療院にあるが、現在の濟世病院は其の理想の一部の實現に過ぎざるものならんも、高潔温誠の心事洵に尊むべきものあり。抑も名利を離れて善徳を行ふの事業は、眞に天意を解し、天職を信するものにして、初めて之に従事し得べく、樂しんで之に従ふものは疑ひもなく人生の最も高貴なる意義を行ひつゝあるものなり、而して君は殆ど是に庶幾し。

君は播州の人、壯年にして米國に航し、クーパー醫科大學に入りて全科を修めたる後、滿一箇年間英國に留學し、二十五年の比布哇ホノル、市日本人病院長として令名あり、越えて三十五年清國廣東省香港病院外科部長に轉じ、本年九

月を以て歸朝したりき、君爲人瀕落にして圭角なく、温厚にして驕慢ならず、完全なる資質の中に犯す可らざるの威嚴を備ふ、口一たび啓けば談論風發の概あるも、概して穩健にして微温的なり、更に多とする所は自信セルフコンフィデンスの人たれども、自負フロンティアの人たらざるに在り、亦以て當世に推重すべきの人。





醫學得業士

越野次丸君

大阪市西區本田一丁目九番地

越野次丸君は越後の人、明治六年を以て刈羽郡石地町に生る。家累代長岡藩士たるを以て、父君は維新の際佐幕黨の一人として各所に轉戦し、後北海道北見國にありて開拓の業に従へり。

君亦た北海の地に人と爲りしも醫學に志し、京都醫學專門學校に入り、研學の功を了へて、明治二十九年開業免狀を得、郷里にありて其業を開けり、然れども君の志尙は之に安せず、大阪に出で、明治三十二年より三十六年まで日本生命保險株式會社の診査醫となり、後現地に其門戸を張れり、内科及小兒科を以て知られ、又學校醫を兼ねつゝあり。

資性剛直にして堅忍不拔、事に當りては仆れて後已むの概を有すしかも人と交はるに溝渠を設けず、磊落の氣ありて知人の間に甚だ重せらる。由來北越の人士は堅忍の性に富むと雖も、往々進取の氣を欠くことなしとせざるに、君は其北越的氣性に加ふるに更に敢爲の氣を以てし、百挫不仆、天職の爲めに研鑽を重ねつゝあるは甚だ多とすべし。



醫學得業士

越野次丸君

大阪市西區本町一丁目九番地

越野次丸君は越後の人、明治六年を以て刈羽郡石地町に生る。家累代長岡藩士たるを以て、父君は維新の際佐幕黨の一人として各所に轉戦し、後北海道北見國にありて開拓の業に従へり。

君亦た北海の地に人と爲りしも、醫學に志し、京都醫學專門學校に入り、研學の功を了へて、明治二十九年開業免狀を得、郷里にありて其業を開けり、然れども君の志尙は之に安せず、大阪に出で、明治三十二年より三十六年まで日本生命保險株式會社の診査醫となり、後現地に其門戸を張れり、内科及小兒科を以て知られ、又學校醫を兼ねつゝあり。

資性剛直にして堅忍不拔、事に當りては仆れて後己むの概を有す、しかも人と交はるに溝渠を設けず、磊落の氣ありて知人の間に甚だ重せらる、由來北越の人士は堅忍の性に富むと雖も、往々進取の氣を欠くことなしとせざるに、君は其北越的氣性に加ふるに更に敢爲の氣を以てし、百挫不仆、天職の爲めに研鑽を重ねつゝあるは甚だ多とすべし。



ドクトル、デント
ール、サーゼリー

寺尾幸吉君

京都市上京區堺町通御池上ル

君は明治十五年一月京都市に生る、岳父を元長翁と云ふ、京都第一中學校を卒りて後、三十七年米國ハンブルグ、ハイスクールに學び、卒業後ロンサンゼルス南加州大學齒科部に入り、本年六月最秀成績を以て業を卒へ、ドクトル、デントール、サーゼリーの榮譽ある月桂冠を贏ち得て歸朝したり。

君意志堅實、普通凡庸の得て及ぶ可らざるものあり、而も温厚にして謹肅、斯界に於ける一勢力家として目せらる、其の技術に至りては、多年の蘊蓄を傾倒して、最も巧妙緻奇を極め、就中金充填の如きは君の獨特壇場を以つて許さるる所、斯界に於ける至寶たるを失はじ。

君、齡自立に至らずして既に此の如し、前途奕々として光榮あるかな。



醫學得業士

寺師貞吉君

大阪市南區九郎右衛門町

君は明治十二年五月、鹿兒島縣伊佐郡大口村に生る。家は世々農を以つて業とし、が感ずる所あり、少壯志を醫學に立て、岐陽の地に笈を負ひ、螢雪の苦を積むこと數年にして、三十四年長崎醫學專門學校を卒業しぬ、其の在學中に於ける君の刻苦精勵は恒に優秀の成績を挙げ、同窓列學の仰望の的たりしと云ふ、三十六年三月、京都醫科大學眼科教室醫員に選ばれ、翌年五月には福岡八幡製鐵所病院眼科に轉じ、三十九年四月まで其の職に在り、次いで五月より四十二年三月に至る間、福島縣福島病院に眼科の醫長として令名ありき、其の大坂に來りたるは本夏七月の事にして、未だ門戸を張りてより僅かに數月を閱

するに過ぎずと雖も、早く既に君の名は江湖に傳稱さるゝに至れり。君の最長所とするところのものは、謂ふまでもなく眼科醫術にして、其の純朴にして些の衒華の風氣あるなく、克く職に忠實に孜々として倦色を見ざるの態度と性格は、當代の新進醫家中、洵に罕とする所稱すべく敬すべき一人格と言はざる可らず、而して君の趣味とせるものは、取りも直さず専門の眼科、其者にして、眼科を措いて他に數ふべき最大趣味なるものゝ存するを認めず、時に閑を得るにわいて玉突、謠曲に快を求むる事ありと雖も、并は君に取りては趣味と名くべからざるものに屬せり、眼科趣味は實に君の唯一多大の趣味とする所也。

而も斯の如く篤學なる君は、猶春秋に富めり、前途の造詣や測る可らざる也。



京都帝國大學京都醫科大學長
正五位勳四等
醫學博士
荒木寅三郎君

京都大學には幾多の碩學あり、其法科に於て、文科に於て、理工科に於て、醫科に於て、鬱然蔚生、眞に一代の偉觀たり、殊に吾人は醫科教室に於ける人材の夙に群を抜けるを聞く、就中其學長として一科の星座を占むる博士荒木君を有するを以て、猶一段の光彩を添ふものあるを耳にせり、抑も此くの如き徳望と才識を有する我が荒木君たるもの、果して如何なる經歷、如何なる特長を有するのぞ。

君は慶應二年十一月を以て群馬縣碓氷郡板鼻町に生る、明治十七年東京帝國大學醫科大學に入學し、二十年別科を卒業するや、翌二十一年より一年間東

京帝國大學醫科大學に於て生理學を専攻したるが、二十二年五月より二十八年十二月まで獨逸に遊學し、ストラスブルグ大學に入りて一般醫學、殊にポツペルザインレル氏に就て生理化學を専攻したり、越えて二十九年一月第三高等學校醫學部教授に任せられ、翌三十年三月醫學博士の學位を授與せらる。三十二年九月京帝國大學醫科大學教授に任せられ、醫化學講座を擔任す、尋いで三十五年四月官命を帯びて歐洲に差遣せられ、歸朝するや三十六年七月を以て京帝國大學京都會醫科大學學長に任せらる。三十八年十月正五位に叙せられ、同年十二月勳四等瑞寶章を授けらる。四十一年六月臨時脚氣病調査會委員を仰せ付けらる。現に其職に在り。

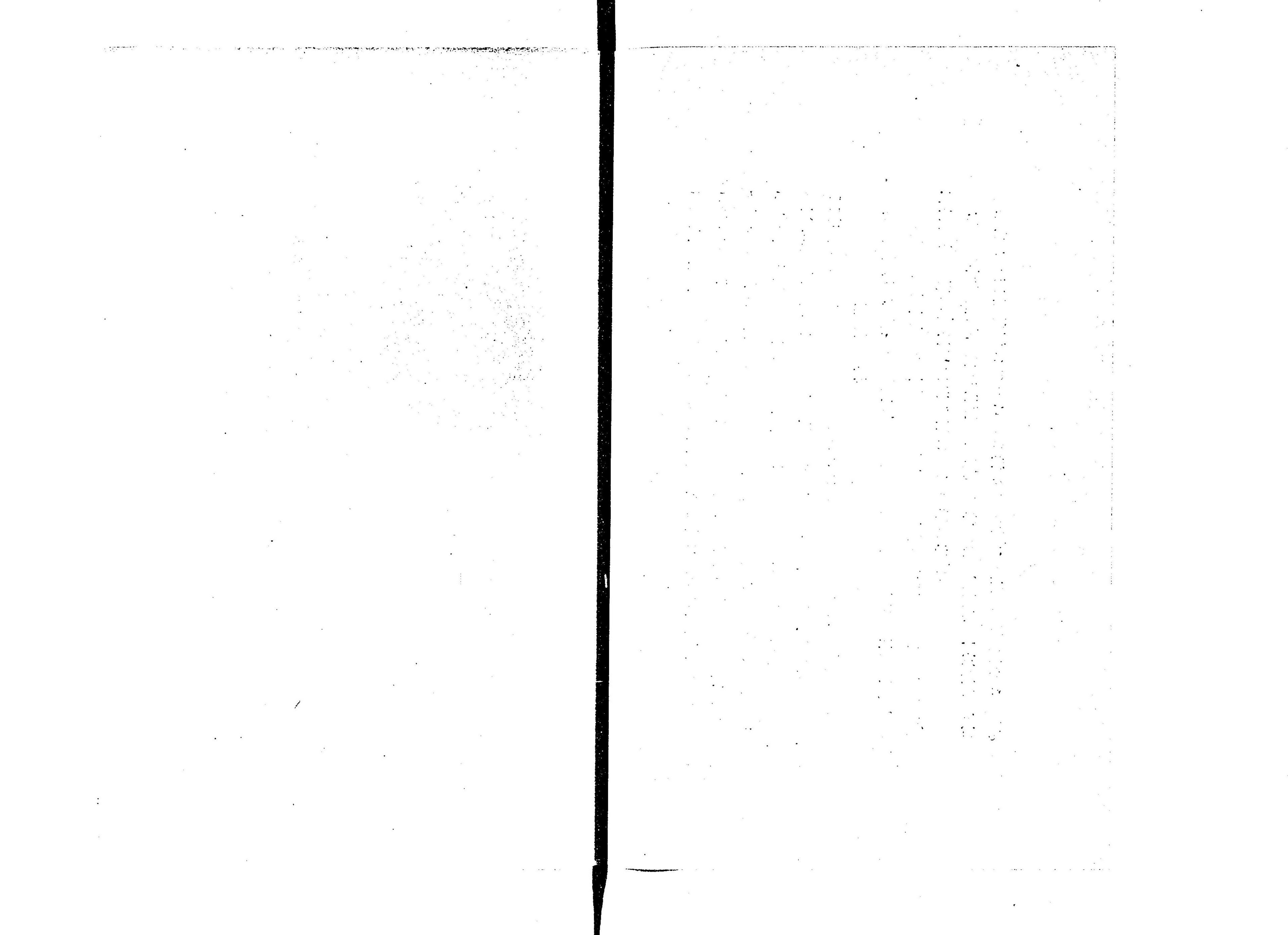
君の京大に在るや、北斗の天に輝けるが如く、衆星翕然として之れに擬ふ。君の其學力に於て、醫術に於て關西に於ける第一人たるのみならず、其生理化學中に於ける血液生理、尿生理の講義は、少くとも一箇年を要し、精緻詳密、寡談博通、其如何に一世の耳目を新たにせるものあるかは、之れを知る者の皆齊しく喧稱する所なり。君は又温良篤實の君子人にして、其後進を愛するや、真に至情

に出づ、尙其教鞭を岡山に執りしが、文部省の命に因りて京都に轉任さるゝところとなるや、學生等之を聞きて深惜の情に堪へず、或者は涙を以て其行を送りたりと傳へらる、一種孚應の感、其如何に後進を激せしむるものあるかを知るべし、君の篤實自強に強きは人の齊しく認むるところなるも、而も君は必しも兀々學究を事とするの迂學者にあらず、能く世事に通じ、時勢を解し、又一種の風徳時に雕蟲の末技を弄することあり、嘗て詩あり曰く

蘇城雜感

蕭颯秋風撼樹來。傷心懶上望鄉臺。曾期傲骨埋荒土。豈許壯心作死灰。
四海誰知賈誼筆。百年徒嘆馬周才。窮通畢竟皆天數。欲取牢愁斥酒杯。
又京都市の郊外亡友野田某の墓に展する詩に云ふ。

每想知音涕淚新。狂將生死付前因。山村日落荒煙冷。一東秋花弔古人。
多忙なる圖書堆裏にありてこの緯々の倚情あり、其高風亦欽すべき哉。





京都帝國大學京都醫科大學教授
正五位
醫學博士
天谷千松君

君は武藏國江戸青山甲賀町に産る。時に萬延元年七月二十日にして、舊幕臣たり。明治七年東京府元外國語學校に入り、獨逸語學を修む。同十一年元東京大學醫學部に進み、獨逸語、羅甸語及醫學全科を修學する。七年間、十八年官費生となり、其四月東京醫科大學を卒業し、二十年第二高等中學校教諭に任せられ、翌年九月第二高等中學校醫學部勤務を命ぜらる。廿三年十月第二高等中學校教授となり、越けて二十九年生理學研究の爲め歐洲に派遣され、居ると滿二ヶ年三十年六月には英國劍橋に於て開會の生理學會委員として參列を仰付られ、三十二年歸朝、其十一月京都帝國大學醫科大學教授に任じ、生理學講座を擔任

し、三十四年三月二日醫學博士となれり、越えて三十六年京都府立醫學專門學校講師を囑托され、三十九年六月正五位に叙せられしが、其の九月京都帝國大學京都文科大學講師を囑托せられ、四十二年京都文科大學生理學の授業を擔任し、今日に追べり。

君は一世の俠醫にして且品格崇高の人たり、資性恬淡磊々落落、權勢に恃まざる富貴に淫せず、昂々然として最高學府に在りて其理想の醫育事業に従ふ、大丈夫の本懐何ぞ之に過ぎん、君は兼ねて計畫の才に秀で、而も一面に於て京大の重鎮として故坪井博士と共に學長荒木博士を助けて京大の經營に任じ、大に偉効を奏したり、吾人の最も君に推服する所は金錢に頗る淡にして毫も名利に戀々たらざる所なり、滔々時流に超越せる高潔の心事は、萬綠叢中の一葉紅とも稱す可きか、是れ慥かに武士道的精神に鍛成せられたる祖先の人格と性行を繼承したる所以ならん。

君は生理學者として學識の深遠なる、蓋し當代第一流、我國醫界の明星として天下後世を照すに足るものあるべく、其の玲瓏玉の如き心性を保持して後

進誘掖に努めつゝあるの一事、特に其の教育方針の爲め大に自ら盡瘁し、たゞに物質的のみならずして、嚴格なる精神的醫育を第一義となす等、實に明治醫人傳中又逸す可からざるの偉人たるべし。

[Faint, illegible text on the left page of a document, possibly bleed-through from the reverse side.]

[Faint, illegible text on the right page of a document, possibly bleed-through from the reverse side.]



從五位
醫學博士

京都帝國大學京都醫科大學教授
足立文太郎君

所謂京大醫科三太郎の中にありて、最も異色あるものを足立文太郎博士と爲す。關西杏林の珍物として其名高く、曾て大阪朝日新聞紙上「珍物畫傳」の劈頭に於て其風采を紹介せられて以來、ますます江湖に喧傳せらるゝに至れり。爛々たる眼光は探海燈の操縦の如くに閃き、蓬々たる頭髮は古ぼけたる鳥打帽子にて掩はれ、邊緣の擦り切れたる羊羹色の縫かへしの洋服に矮軀を裹み、栗色ズツクの頭陀袋は、怪しき紐にて斜に肩邊を横ざりて左脇に吊垂せられ、胸間の時計は無雜作に唐絲の束を以て繫がれ、雨天の際は洋服著に高足駄を突き掛けて校門を出入するところ、如何に最負目に見るも、京大教授とは値

踏みすべからず、確かに人間以上に飄逸せる概あり。

其講堂に立て講演するや、難澁にして爆發的なる音調は、雷の如く鐘の如く、特に熱心にして懇到なるの餘、冗漫に過ぎて學生をして時々了解に苦ましむるありと云ふも、其奇想に富みたる比喩極めて適切にして、淡泊無味の記載學をして、頗る節面白く印象せしむるものあり、其手腕の尋常ならざるを見るべく、其厭くまでも學生に同情して、感化誘掖、太だ努むる所、大に其選を異にするものあり。

伊豆高田郡上狩野村の人にして、慶應元年を以て生る、明治十二年七月東京醫科大學に入り、廿七年を以て之を終へ、翌年四月第三高等學校醫學部講師となり、三十年十月を以て教授に進み、而して三十二年五月解剖學研究の爲め、獨逸に留學を命せられたるが、官游期滿つるも未だ歸らず、百方力を盡して資金を作り、更に滯留すること三年、大に研究を遂げたるの一事は、今尙は以て美談として存す、由來解剖學を専念攻究する人の如きは、篤學にして時俗に超出せる點なかるべからず、博士の如き眞に然りとす、三十七年五月を以て歸朝、直に

醫學博士の學位を得、京大教授となり、解剖學第二講座を擔任して今に及べり。
世の醫人を擧げて利益の爭奪に齟齬せしめ、俗臭紛々たる中にありて超然
逸出、潜心講學に餘念なき博士の如き、洵に帝國文運の爲めに推尙すべく、世の
徒らに奇人呼ばはりするが如きは甚だ其禮を失せるものあるを思はずんば
あらず。

